鳥取県米子市

石井要害跡Ⅳ

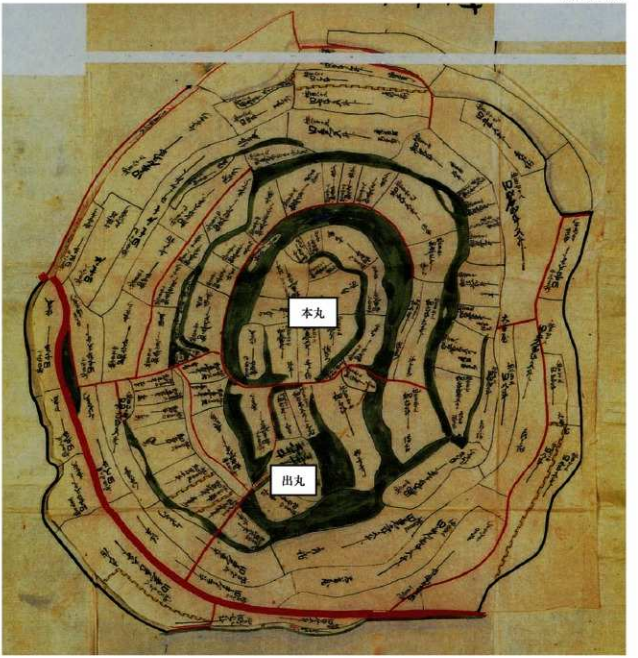
2020．3
一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書19

鳥取県米子市

石井要害跡Ⅳ

2020．3
一般財団法人　米子市文化財団



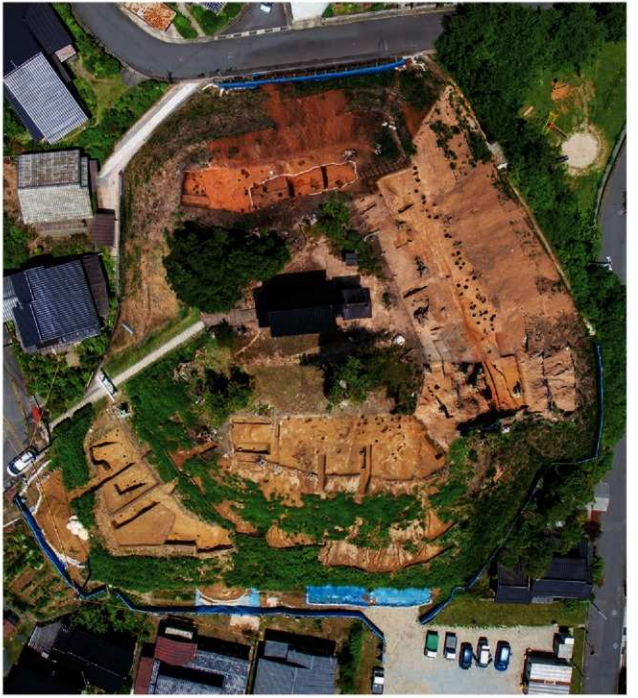
石井村田畑地続字限絵図・字要害（明治２年）

米子市立山陰歴史館所蔵

巻頭図版２

石井村・橋本村古城跡（『因伯古城跡図志』）　鳥取県立博物館所蔵

石井要害跡全景（西から）



第１次～第４次調査全景（上が北西）

序

当財団では、令和元年度に鳥取県の委託を受け、石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い中世城館の石井要害跡の発掘調査（第４次調査）を実施しました。

調査の結果、出丸の頂部の平坦面では土塁が検出され、16世紀前半には、第１次・第３次調査と同様に15世紀後半の腰郭を埋め立てて郭を拡張していることが再確認されました。また、これまでの４次にわたる発掘調査によって、石井要害跡の様相がかなり明らかとなり、中世城館を研究するうえで貴重な一資料を得ることができたと思います。

この度、調査成果をまとめ、発掘調査報告書として『石井要害跡Ⅳ』を刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました鳥取県西部総合事務所米子県土整備局ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

一般財団法人　米子市文化財団
理事長　杉　原　弘一郎

例　　言

1．本報告書は、鳥取県が計画する石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い、令和元年度に米子市石井地内で実施した石井要害跡第４次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、鳥取県の委託を受けて一般財団法人　米子市文化財団が実施した。
3．本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Yの数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。また、レベルは海抜標高を示す。
4．本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の１/50,000地形図「米子」、米子市作成の１/2,500「米子市都市計画図」、及び鳥取県西部総合事務所米子県土整備局作成の１/500「石井地区急傾斜地崩壊防止工事平面図」を加筆して使用した。
5．出土遺物を整理、評価するにあたり、備前焼については、丸亀市教育部総務課文化財保護室　乗岡　実氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。
6．本発掘調査における調査後空中写真撮影は業者に委託した。
7．本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室で行った。
8．本報告書で使用した遺構、遺物写真は調査担当職員が撮影した。
9．本報告書の執筆及び編集は、高橋が行った。
10．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物は、米子市文化振興課で保管している。

凡　　例

1．遺構の略称は「ISYG4」とした。
2．本報告書における遺構名及び遺構番号は、調査地が近接する第１次～第３次調査との混同を防ぐため、ピット番号を除いて、第１次調査からの通し番号とした。
3．本報告書における遺物の縮尺は以下のとおりである。
　　土器、陶磁器：１/３
4．本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
6．遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
7．ピット計測表において（　）で表したものは残存部分での計測値である。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査の経過 ……1
　第３節　整理作業の経過 ……2
　第４節　調査体制 ……2

第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 ……4
　第２節　歴史的環境 ……4

第３章　調査の概要
　第１節　調査の方法……10
　第２節　遺跡の立地と層序
　　１．遺跡の立地と現状……12
　　２．遺跡の層序……12
　第３節　検出した遺構と遺物
　　１．Ⅰ　　期 ……13
　　２．Ⅱ－１期 ……17
　　３．Ⅱ－２期 ……18
　　４．Ⅱ－３期 ……23
　　５．Ⅲ　　期 ……26

第４章　総　　括
　第１節　出丸の構造と機能
　　１．Ⅰ　　期 ……28
　　２．Ⅱ－１期 ……31
　　３．Ⅱ－２期 ……32
　　４．Ⅱ－３期 ……32
　　５．Ⅲ　　期 ……41
　第２節　出土遺物について
　　１．第４次調査出土土器・陶磁器について……41
　　２．出土遺物から見た空間的機能……44

遺物観察表……45

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 ……1
第２図　調査地位置図 ……3
第３図　周辺遺跡分布図 ……8
第４図　石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図 ……9
第５図　調査区配置図及びグリッド設定図……10
第６図　土層図……11
第７図　Ⅰ期の遺構分布図……13
第８図　Ⅰ期　土塁１遺構図……14
第９図　腰郭８遺構図……15
第10図　腰郭８出土遺物図……15
第11図　腰郭11、12遺構図及び出土遺物図……16
第12図　Ⅱ−１期の遺構分布図 ……17
第13図　Ⅱ−１期　郭１出土遺物図 ……18
第14図　Ⅱ−１期　土塁１遺構図 ……19
第15図　Ⅱ−１期　腰郭９出土遺物図 ……20
第16図　Ⅱ−２期の遺構分布図 ……20
第17図　Ⅱ−２期出土遺物分布図 ……21
第18図　Ⅱ−２期　郭１出土遺物図 ……22
第19図　Ⅱ−２期　腰郭９出土遺物図 ……22
第20図　段状遺構５遺構図……23
第21図　Ⅱ−２期　切岸出土遺物図 ……23
第22図　Ⅱ−３期の遺構分布図 ……24
第23図　Ⅱ−３期出土遺物分布図 ……25
第24図　Ⅱ−３期　郭１出土遺物図 ……25
第25図　Ⅱ−３期　腰郭９出土遺物図 ……25
第26図　Ⅱ−３期　切岸出土遺物図 ……25
第27図　Ⅲ期の遺構分布図及び出土遺物分布図……26
第28図　Ⅲ期　遺構外出土遺物図……27
第29図　第１次〜第４次調査　Ⅰ期の遺構分布図……29・30
第30図　第１次〜第４次調査　Ⅱ−１期の遺構分布図 ……33・34
第31図　第１次〜第４次調査　Ⅱ−２期の遺構分布図 ……35・36
第32図　第１次〜第４次調査　Ⅱ−３期の遺構分布図 ……37・38
第33図　第１次〜第４次調査　Ⅲ期の遺構分布図……39・40
第34図　器種・産地別組成図……42
第35図　土器の器種別組成図……43
第36図　貿易陶磁の組成図……43

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 ……7
第２表　石井要害跡　第４次調査出土土器・陶磁器集計表……42
第３表　腰郭８出土遺物観察表……45
第４表　腰郭11出土遺物観察表……45
第５表　腰郭12出土遺物観察表……45
第６表　Ⅱ－１期　郭１出土遺物観察表 ……45
第７表　Ⅱ－１期　腰郭９出土遺物観察表 ……45
第８表　Ⅱ－２期　郭１出土遺物観察表 ……46
第９表　Ⅱ－２期　腰郭９出土遺物観察表 ……46
第10表　Ⅱ－２期　切岸出土遺物観察表 ……47
第11表　Ⅱ－３期　郭１出土遺物観察表 ……47
第12表　Ⅱ－３期　腰郭９出土遺物観察表 ……47
第13表　Ⅱ－３期　切岸出土遺物観察表 ……47
第14表　Ⅲ期　遺構外出土遺物観察表……47

写真図版目次

巻頭図版１　石井村田畑地続字限絵図・字要害
巻頭図版２　石井村・橋本村古城跡（『因伯古城跡図志』）
　　石井要害跡全景（西から）
巻頭図版３　第１次～第４次調査全景（上が北西）
図版１　２区　北東側斜面　調査前状況（北東から）
　　２区　調査地全体　調査前状況（北西から）
図版２　２区　頂部平坦面　調査前状況（北西から）
　　２区　斜面中腹平坦地　調査前状況（北西から）
図版３　調査位置全景（上が北西）
　　調査地全景（上が南西）
図版４　調査地全景（北西から）
　　調査地全景（北東から）
図版５　調査地全景（南東から）
　　頂部平坦面土層
図版６　斜面部土層
　　斜面中腹平坦地土層
図版７　１区　Ⅰ期の遺構全景（北西から）
　　２区　Ⅰ期の遺構全景（北西から）
図版８　１区　Ⅰ期　頂部平坦面（北西から）
　　２区　Ⅰ期　頂部平坦面（北西から）
図版９　１区　Ⅰ期　腰郭８（北西から）
　　２区　Ⅰ期　腰郭８（北西から）
図版10　Ⅰ期　腰郭11平坦面（北東から）
　　Ⅰ期　腰郭12（北東から）
図版11　Ⅰ期　腰郭12（北東から）
　　Ⅰ期　腰郭11、12土層
図版12　２区　Ⅱ－１期の遺構全景（北西から）
　　２区　Ⅱ－１期　頂部平坦面（北西から）
図版13　２区　Ⅱ－１期　腰郭９（北西から）
　　２区　Ⅱ－１期　腰郭９（南東から）
図版14　Ⅱ－１期　土塁１（北東から）
　　Ⅱ－１期　土塁１（南西から）
図版15　１区　Ⅱ－２期の遺構面検出状況（北西から）
　　２区　Ⅱ－２期の遺構面検出状況（北西から）
図版16　１区　Ⅱ－２期　郭１（北西から）
　　２区　Ⅱ－２期　郭１（北西から）
図版17　１区　Ⅱ－２期　腰郭９平坦面検出状況（北西から）
　　２区　Ⅱ－２期　腰郭９平坦面検出状況（北西から）
図版18　Ⅱ－２期　段状遺構５（北東から）
　　Ⅱ－２期　段状遺構５（南東から）
図版19　１区　Ⅱ－３期の遺構全景（北西から）
　　２区　Ⅱ－３期の遺構全景（北西から）
図版20　１区　Ⅱ－３期　郭１（北西から）
　　２区　Ⅱ－３期　郭１（北西から）
図版21　１区　Ⅱ－３期　腰郭９（北西から）
　　２区　Ⅱ－３期　腰郭９（北西から）
図版22　１区　Ⅲ期の遺構全景（北西から）
　　２区　Ⅲ期の遺構全景（北西から）
図版23　１区　Ⅲ期　頂部平坦面（北西から）
　　２区　Ⅲ期　頂部平坦面（北西から）
図版24　１区　Ⅲ期　溝３（北西から）
　　２区　Ⅲ期　溝３（北西から）
図版25　腰郭８出土遺物
　　腰郭11出土遺物
　　腰郭12出土遺物
　　Ⅱ－１期　郭１出土遺物
　　Ⅲ期　遺構外出土遺物（１）
図版26　Ⅱ－１期　腰郭９出土遺物
図版27　Ⅱ－２期　郭１出土遺物
図版28　Ⅱ－２期　腰郭９出土遺物
図版29　Ⅱ－２期　切岸出土遺物
　　Ⅱ－３期　郭１出土遺物
　　Ⅱ－３期　腰郭９出土遺物
　　Ⅱ－３期　切岸出土遺物
図版30　Ⅲ期　遺構外出土遺物（２）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市石井地内において計画された石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

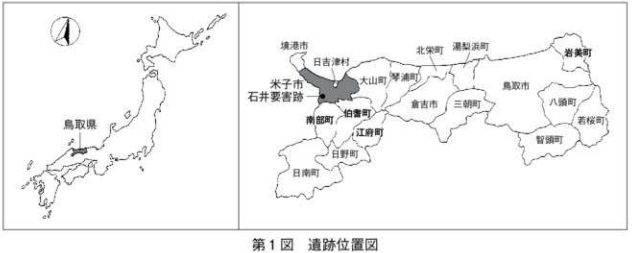
工事対象地は、周知の遺跡である石井要害跡の出丸として認識されており、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要が生じた。現地踏査では、丘陵の頂部は平坦地形となっていることから、郭の存在が窺え、また、米子市教育委員会（現　米子市文化振興課）が平成28年度に実施した試掘調査では、丘陵の北東側斜面で腰郭が検出され、土師器と陶磁器が出土した。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所と米子市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そのため、米子市は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、当財団は、令和元年６月20日付で文化財保護法第92条に基づく発掘調査届を鳥取県知事に提出し、令和元年７月２日付で鳥取県と契約をした。それに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

発掘調査は、出丸の工事対象地の500㎡を対象とし、令和元年８月19日から令和元年10月16日までの期間で現地調査を行った。

調査対象地は、出丸の頂部平坦面の東側とその北東側斜面であり、急斜面であるため、重機の搬入ができないことから、人力で表土及び包含層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。調査の最終段階では、業者委託により調査後の空中写真撮影を実施した。



第１図　遺跡位置図

調査日誌抄

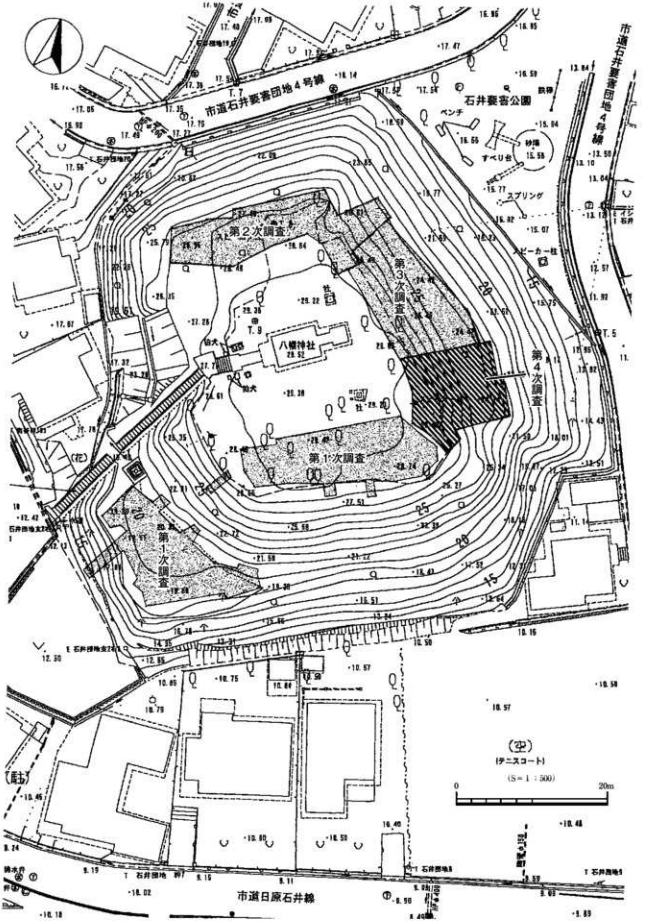
8月19日	発掘器材搬入、草刈り、調査地及び周辺の環境整備
	発掘作業員稼働開始
	調査区割のための杭打ち
8月22日～	発掘作業員稼働による表土・包含層の掘削及び遺構検出
	1区の調査開始
8月26日	第1遺構面（Ⅲ期）調査終了
9月5日	第2遺構面（Ⅱ-3期）調査終了
9月9日	第3遺構面（Ⅱ-2期）調査終了
9月11日	第4遺構面（Ⅰ・Ⅱ-1期）調査終了
9月12日	1区の調査終了
9月13日	2区の調査開始
9月17日	第1遺構面（Ⅲ期）調査終了
9月24日	第2遺構面（Ⅱ-3期）調査終了
9月30日	第3遺構面（Ⅱ-2期）調査終了
10月10日	第4遺構面（Ⅰ・Ⅱ-1期）調査終了
10月16日	業者委託による調査後空中写真撮影実施
	発掘調査現場片付け、発掘器材撤収
	調査終了

第3節　整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、令和元年度に実施した。出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第4節　調査体制

調査主体　一般財団法人　米子市文化財団
理　事　長　杉原弘一郎
常 務 理 事　先灘達也（一般財団法人　米子市文化財団事務局長）
埋蔵文化財調査室
室長兼調査員　小原貴樹
次長兼統括調査員　佐伯純也（令和元年7月31日まで）
主　　事　田中昌子
調査担当　室長兼調査員　小原貴樹
主任調査員　高橋浩樹
調査補助員　永登朋子
指導・助言　米子市文化振興課・鳥取県地域づくり推進部文化財局


市道石井要害団地4号線
石井要害公園
ベンチ
砂場
すべり台
スプリング
ピーカー柱
第2次調査
第3次調査
第4次調査
第1次調査
第1次調査
八幡神社
市道日原石井線
(テニスコート)
(S=1:500)
0
20m

第２図　調査地位置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

米子市は、鳥取県の西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

地形的には、中国山地に源を発する日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山、中国山地から続くなだらかな山地や丘陵によって構成されている。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した２条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積世の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。また、北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された砂州の弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

米子市は、弓浜半島南部から米子平野北部、そして大山北西麓にかけて市域が広がり、北は境港市、東は大山町、南東は伯耆町、南は南部町、西は島根県安来市とそれぞれ接している。

石井要害跡は米子市西部の米子市石井に所在する。この地は米子市街地の南約３㎞にある農村地帯で西へ約２㎞行けば島根県との県境となる。

調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡が立地する丘陵は、昭和44年に住宅団地造成工事のため大半が削平されているが、明治２年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』によると、楕円形の城郭として丘陵は３段に削られ、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。また、この辺りは出雲や備後に至る街道が通過し、橋本七尾城とともに西伯耆の防御拠点であった。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

周辺での人々の生活の痕跡は旧石器時代まで遡る。長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡（21）では、大山テフラ層中から頁岩製のナイフ形石器が１点出土し、古墳の周溝からもナイフ形石器が出土している。また、坂長村上遺跡（58）では大山テフラの漸移層からであるが、黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代草創期には奈喜良遺跡（22）、陰田宮の谷遺跡（31）、吉谷亀尾ノ上遺跡（42）、福成石佛前遺跡（46）、境北井垰遺跡（44）、境矢石遺跡（45）、諸木遺跡（51）、坂長村上遺跡（58）から尖頭器が出土している。

縄文時代早期には大山西麓に遺跡が集中しており、日野川左岸では当該期の遺跡は少なく、清水谷

遺跡（48）で黄島式～高山寺式に比定される押型文土器、新山山田遺跡（38）で早期中葉の押型文土器が少量出土しているのみである。

早期末から前期になると中海沿岸で集落の形成が行われるようになり、このような遺跡には目久美遺跡（4）、陰田第1遺跡（30）、陰田第7遺跡（27）、陰田第9遺跡（29）がある。目久美遺跡では当該期には土器とともに多量の石錘と動植物遺体が出土している。また、陰田第9遺跡では、轟式の影響を受けた土器が出土している。

中期には現在のところあまり明確ではないが、遺跡の数が減少する傾向にある。目久美遺跡では、この時期のドングリ貯蔵穴が多数確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡には、目久美遺跡、陰田第1遺跡、陰田第7遺跡、古市河原田遺跡（40）、青木遺跡（16）などがあり、青木遺跡では多数の陥穴が確認されている。

晩期には目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、新山下山遺跡（36）、古市河原田遺跡などがあり、古市河原田遺跡からは晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期には、目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落が形成され、長砂第1遺跡（6）でも前期後葉～中期初頭の水田跡が確認されている。また、前期末～中期前葉には清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡（53）天王原遺跡（56）で断面V字状の環濠が確認されている。

中期には遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。目久美遺跡、長砂第2遺跡（7）は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の2面の水田跡が検出され、長砂第2遺跡でも前期末～中期前葉と中期後葉～後期の水田跡が確認されている。

後期には前期～中期の拠点的な集落は継続するものは少なく、中期後葉から後期にかけて青木遺跡、福市遺跡（15）、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群（61）のように新たに拠点的な集落が形成され、古墳時代へと継続する。また、中期後葉～後期には遺跡は低地から丘陵へ立地が移動する傾向にあり、このような遺跡には陰田第1遺跡、陰田第6遺跡（28）、吉谷銭神遺跡（41）などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

古墳時代

前期の古墳には日原6号墳（13）、普段寺1号墳・2号墳（54）などがある。日原6号墳は一辺21mの方墳で、箱形木棺3基、割竹形木棺1基、土壙墓2基が検出されている。普段寺1号墳は全長23mの前方後方墳で、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。普段寺2号墳は直径22～23mの円墳と考えられ、三角縁四神四獣鏡が出土している。青木遺跡では小型の方墳10基と円墳7基からなる古墳群と、これらとの階層差を示す方形周溝墓群が確認され、福市遺跡日焼山地区では土壙墓群が検出されている。

前期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡などがあり、池ノ内遺跡（5）では水田跡が検出されている。

中期の古墳には陰田41号墳、水道山古墳（８）、新山山田古墳群（39）、三崎殿山古墳（52）、浅井11号墳、福成春日山古墳などがある。陰田41号墳は直径30mの円墳で、若年の女性を埋葬した箱式石棺を有する。新山山田古墳群は10基からなる古墳群で、７号墳からは珠文鏡が出土している。三崎殿山古墳は全長108mの前方後円墳で、西伯耆最大の規模を誇る。福成春日山古墳は全長30m級の前方後円墳で、頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。また、水道山古墳からは斜縁八神鏡、浅井11号墳からは画文帯神獣鏡が出土している。

中期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡（37）などがある。

後期には群集墳が造られるようになり、本遺跡の周辺には東宗像古墳群（11）、宗像古墳群（12）、新山山田古墳群などがある。また、西伯耆地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、６世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ陰田横穴墓群、大塔山横穴墓群（10）、マケン堀横穴墓群（50）などがあり、これらはいずれも後背墳丘を有するという特色をもつ。

この時期の集落には青木遺跡、福成早里遺跡（47）、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

この時期の遺跡は法勝寺川西岸と長者原台地に多く分布している。法勝寺川西岸では、陰田遺跡群（24～26、28、31～35）、新山遺跡群（36～38）などがあり、これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築している。また、これらの遺跡では鍛冶、製鉄関連の遺構、遺物が検出され、さらに、木簡や円面硯、墨書土器などが出土しており、７世紀後半以降、官衙的性格を有するようになる。また、陰田第６遺跡では石敷道路が確認されており、中海沿岸と内陸部を結ぶ道と考えられている。以上のことから伯耆、出雲国境近くに位置するこの地域は極めて重要な場所であったと考えられる。

一方、長者原台地では法起寺式の伽藍配置をもつ白鳳期の大寺廃寺跡や平安時代の坂中廃寺跡があり、さらに、これらに近接する長者屋敷遺跡（57）、坂長下屋敷遺跡（59）、坂長第６遺跡（60）では官衙的配置をとる大型建物群が確認されており、長者原台地上に会見郡衙が存在していたことが明らかとなりつつある。

集落としては青木遺跡、樋ノ口第４遺跡（17）、諏訪西山ノ後遺跡などがあり、樋ノ口第４遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎３枚、刀子、鋤先、墨挺を入れて埋納した胞衣埋納遺構が検出されている。

中　　世

南北朝から戦国期の動乱を背景として米子市内には石井要害（14）、橋本七尾城（23）、新山要害（43）、戸上山城（９）、飯山城（２）、河岡城、尾高城などが築かれる。『伯耆志』によると、橋本七尾城は守護山名氏の重臣行松氏が在城し、石井要害は片山小四郎が在城し、出雲からの侵攻に備えたという。

古墓は長者原台地で多く確認されており別所長峰古墓（18）、諏訪１号墳（19）、青木遺跡、別所中原地下式横穴(20)がある。別所長峰古墓と諏訪１号墳は、方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝篋印塔あるいは五輪塔を建てていたと思われる。別所中原地下式横穴では地下式の横穴墓

が３基検出された。経塚は長砂町と奥谷で発見されているが、いずれも遺構は不明である。錦町第１遺跡（３）では畠跡が検出されている。

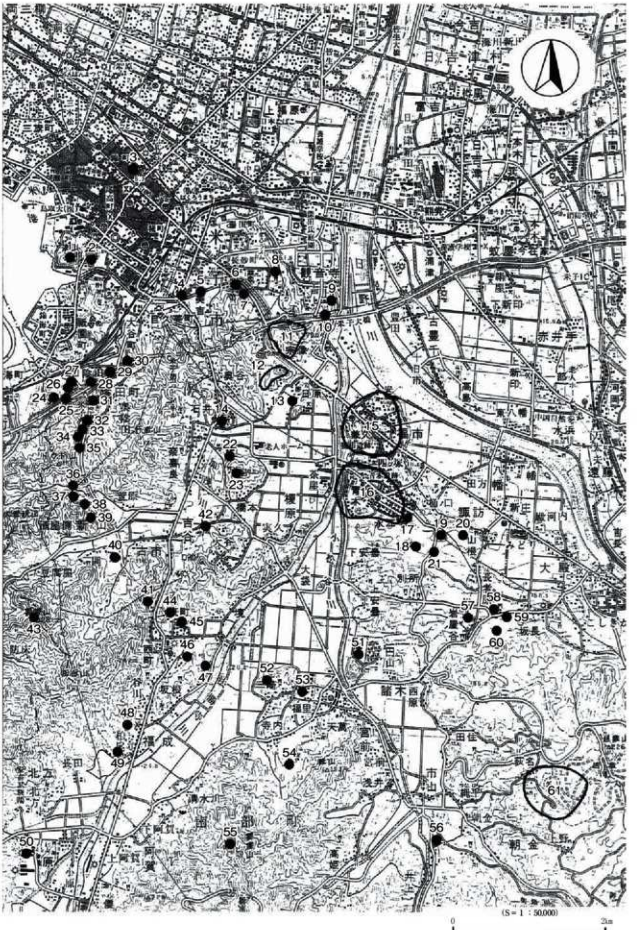
近世・近代

近世の城下町の中心であった米子城は天正19年（1591）に東出雲、西伯耆、隠岐12万石の吉川広家によって築城が開始されるが、慶長５年(1600)周防国岩国に転封される。かわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年（1609）に中村家は断絶し、その後、慶長15年（1610）に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡６万石を領有し、米子城主となる。やがて元和３年（1617）池田光政が因伯２国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永９年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治２年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

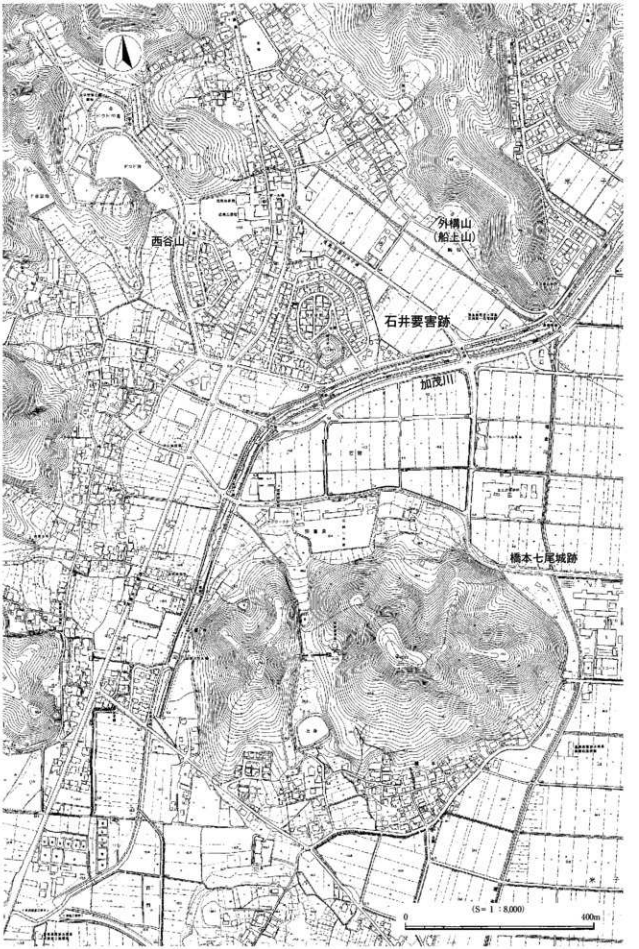
米子市石井は近世には石井村と称した。法勝寺往来がほぼ南北に通り、藩政期の拝領高は419石余、本免は四ツ五分で、全村が米子荒尾氏の給地であった。幕末の『六郡郷村生高竈付』では生高471石余、竈数66とあり、『伯耆志』では林46町２反余、家数66、人数300とある。また、明治12年の『共武政表』では家数66、男102、女121、牛27、馬１とある。石井村は明治22年（1889）には会見郡成実村大字石井となり、昭和29年（1954）には米子市石井となり、現在に至っている。

1	米子城跡	2	飯山城跡	3	錦町第１遺跡	4	目久美遺跡
5	池ノ内遺跡	6	長砂第１遺跡	7	長砂第２遺跡	8	水道山古墳
9	戸上山城跡	10	大塔山横穴墓群	11	東宗像古墳群	12	宗像古墳群
13	日原６号墳	14	**石井要害跡**	15	福市遺跡	16	青木遺跡
17	樋ノ口第４遺跡	18	別所長峰古墓	19	諏訪１号墳	20	別所中原地下式横穴
21	諏訪西山ノ後遺跡	22	奈喜良遺跡	23	橋本七尾城跡	24	陰田荒神谷遺跡
25	陰田小犬田遺跡	26	陰田ヒチリザコ遺跡	27	陰田第７遺跡	28	陰田第６遺跡
29	陰田第９遺跡	30	陰田第１遺跡	31	陰田宮の谷遺跡	32	陰田広畑遺跡
33	陰田隠れが谷遺跡	34	陰田ハタケ谷遺跡	35	陰田夜坂谷遺跡	36	新山下山遺跡
37	新山研石山遺跡	38	新山山田遺跡	39	新山山田古墳群	40	古市河原田遺跡
41	吉谷銭神遺跡	42	吉谷亀尾ノ上遺跡	43	新山要害跡(長台寺城跡)	44	境北井垣遺跡
45	境矢石遺跡	46	福成石佛前遺跡	47	福成早里遺跡	48	清水谷遺跡
49	丸山固屋跡(小鷹城跡)	50	マケン堀横穴墓群	51	諸木遺跡	52	三崎殿山古墳
53	宮尾遺跡	54	普段寺１・２号墳	55	手間要害跡	56	天王原遺跡
57	長者屋敷遺跡	58	坂長村上遺跡	59	坂長下屋敷遺跡	60	坂長第６遺跡
61	越敷山遺跡群						

第１表　周辺遺跡一覧表



第３図　周辺遺跡分布図



第４図　石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図

第３章　調査の概要

第１節　調査の方法

石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事は、石井要害跡の丘陵斜面が災害等により崩壊するのを防止する工事であり、本工事は、既に崩壊対策工事が行われている一部分を除いた、丘陵のほぼ全周が対象となっている。しかし、工区によって工事の事業主体が鳥取県・米子市と異なっているうえに、さらに鳥取県・米子市とも工区が各々２工区に分かれているために、全体として調査区を４つに分けて調査を実施した。本調査は、その第４次調査である。

発掘調査は、出丸の丘陵頂部平坦面の東側とその北東側斜面を対象として実施したが、北東側斜面の中腹以下は、昭和44年の住宅団地造成工事によって大きく削平されており、調査対象から除外した。また、工事の工程の都合により、調査区を２つに分け、北西側を１区、南東側を２区とした（第５図）。

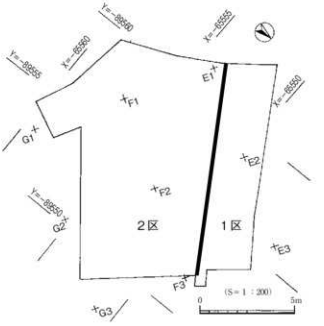
調査地は、急斜面であるために重機の使用ができないことから、人力で表土及び包含層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。

調査にあたっては、任意に５m画のグリッドを設定し、グリッド単位で調査を行った。グリッドは北西から南東へ向かってD～Gとし、南西から北東へ向かって０～３とした。グリッド名は西側の杭の名称をとって呼称した（第５図）。

また、頂部平坦面の南西側は工事による法面よりも深く掘り込まれている部分があり、工事の関係上、工事による法面よりも深く遺構掘削ができないため、その部分については遺構を掘削することは避け、２区については地山が浅かったため、地山上面まで調査を実施したが、１区は第３遺構面（Ⅱ-２期）までの調査に留め、調査の最終段階で、１区、２区とも工事の支障のない頂部平坦面の北東側をトレンチ状に掘削して下層の遺構、遺物を確認した。

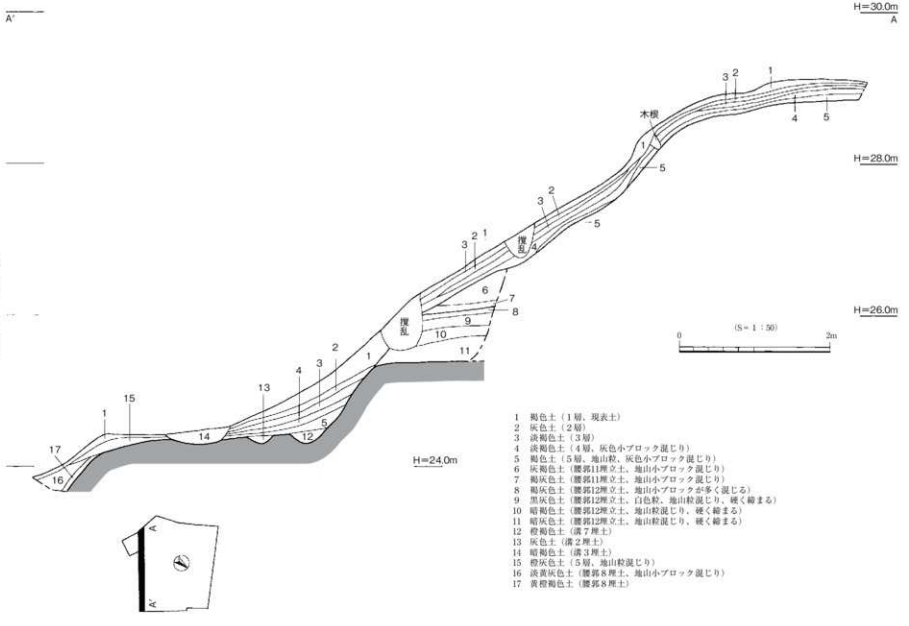
なお、Ⅱ-２期の腰郭９は、地山の上に地山ブロック混じりの褐色土を10cm前後盛土して整地を行っているが、平坦面では遺構の検出が困難であったため、地山上面で検出した遺構のうち、埋土の状況から帰属時期を判断した。

検出した遺構と遺物の記録には、遺跡調査システムを用いた。また、写真撮影は、35mmの一眼レフカメラを使用し、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてコンパクトデジタルカメラも使用した。



第５図　調査区配置図及びグリッド設定図

第96図　土層図



1　褐色土（1層，現表土）
2　灰色土（2層）
3　淡褐色土（3層）
4　淡褐色土（4層，灰色小ブロック混じり）
5　褐色土（5層，地山粒，灰色小ブロック混じり）
6　灰褐色土（腰第11埋立土，地山小ブロック混じり）
7　褐灰色土（腰第11埋立土，地山小ブロック混じり）
8　褐灰色土（腰第12埋立土，地山小ブロックが多く混じる）
9　黒灰色土（腰第12埋立土，白色粒，地山粒混じり，硬く締まる）
10　暗褐色土（腰第12埋立土，地山粒混じり，硬く締まる）
11　暗灰色土（腰第12埋立土，地山粒混じり，硬く締まる）
12　橙褐色土（溝7埋土）
13　灰色土（溝2埋土）
14　暗褐色土（溝3埋土）
15　橙灰色土（5層，地山粒混じり）
16　淡黄灰色土（腰第8埋土，地山小ブロック混じり）
17　黄橙褐色土（腰第8埋土）

第２節　遺跡の立地と層序

１．遺跡の立地と現状

石井要害跡は、来子平野の西部に位置する。調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡は、明治２年作成の「石井村田畑地続字限絵図・字要害」によると楕円形の城郭として丘陵は三段に構築され、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。昭和44年に住宅団地造成工事のため大半が削平され、南側の八幡神社が鎮座している丘陵が残存しているのみである。この丘陵の頂部は平坦となっており、郭として機能したと考えられる。また、南西側及び南東側の切岸と南西側の腰郭は比較的良好に遺存しているが、北西側は住宅団地造成工事のため大きく削平され、北東側は斜面上部に切岸と腰郭が僅かに旧状を留めているのみである。

２．遺跡の層序（第６図）

調査地の層序は、調査区の南東壁で観察した。

頂部平坦面から斜面部にかけては、現地表面から褐色土（１層、現表土）、灰色土（２層）、淡褐色土（３層）、灰色小ブロックが混じる淡褐色土（４層）、地山粒と灰色小ブロックが混じる褐色土（５層）となっており、５層よりも下層は、腰郭11と腰郭12の埋め立て土となっている。

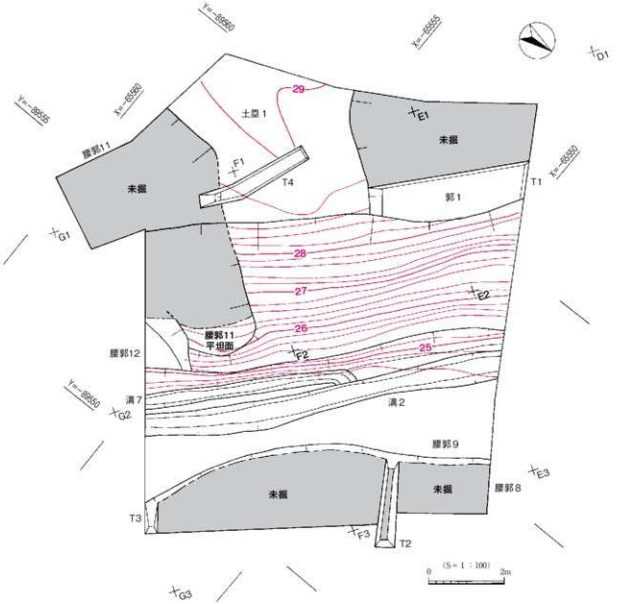
斜面中腹の平坦地では、南西側は現地表面から、褐色土（１層、現表土）、灰色土（２層）、淡褐色土（３層）、灰色小ブロックが混じる淡褐色土（４層）、地山粒と灰色小ブロックが混じる褐色土（５層）、地山となっているが、北東側は現地表面から褐色土（１層、現表土）、地山粒が混じる橙灰色土（５層）、地山となっている。

今回の調査では、３層上面を第１遺構面、４層上面を第２遺構面、５層上面を第３遺構面、地山上面を第４遺構面として遺構を検出したが、斜面中腹の平坦地では、地山上面で２時期の遺構を確認した。

第３節　検出した遺構と遺物

今回の調査は、出丸の頂部平坦面の東側とその北東側斜面を対象として調査を実施した。今回の調査では、現代の遺構も含めて５時期の遺構面が確認された。本稿では、石井要害跡に関わるものについては、第１次～第３次調査との整合性を持たせるために時期の古い順にⅠ～Ⅲ期として報告するが、今回の調査では、第３次調査と同様にⅡ期には３面の遺構面が存在することから、さらにⅡ期をⅡ-１～Ⅱ-３期に細分して報告する。

各時期の帰属時期については、Ⅰ期は、出土遺物から15世紀後半に帰属すると考えられる。Ⅱ期は、出土遺物やⅠ期の腰郭を埋め立てて第１次、第２次調査と同様に郭の拡張を行っていることから16世紀前半～中頃に帰属すると考えられる。Ⅲ期は、既往の調査では近世以降としているが、今回の調査では近世の遺構は認められず、現代の遺構を確認した。



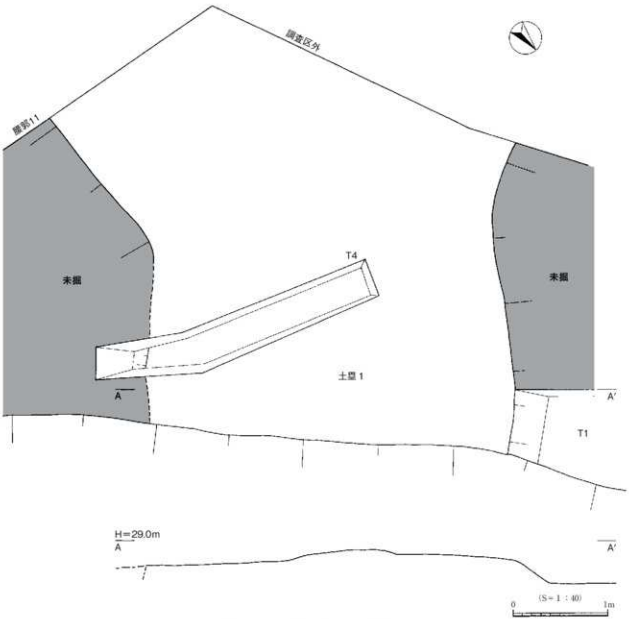
第７図　Ⅰ期の遺構分布図

１．Ⅰ　期

Ⅰ期の遺構は、地山上面（第４遺構面）で検出した。頂部平坦面では、北東−南西方向に土塁１がのび、その北西側ではトレンチ調査であるが郭１が検出された。調査区の南東側の頂部平坦面から切岸にかけては腰郭11があり、その東側の切岸の裾部には腰郭12がある。また、北東側斜面の中腹では腰郭８、９の２郭が構築されている。

郭１（第７図）

郭１は、出丸の頂部平坦面の郭であるが、１区については工事による法面保護のため、第３遺構面（Ⅱ−２期）までの調査に留めたが、２区については地山が浅かったため、地山まで掘り下げて遺構を検出した。当該期については、工事に支障のない北東側にトレンチ（Ｔ１）を設定して、平坦面及び平坦面での遺構の有無を確認した。平坦面の標高は、28.5mを測り、遺構、遺物は検出されなかった。



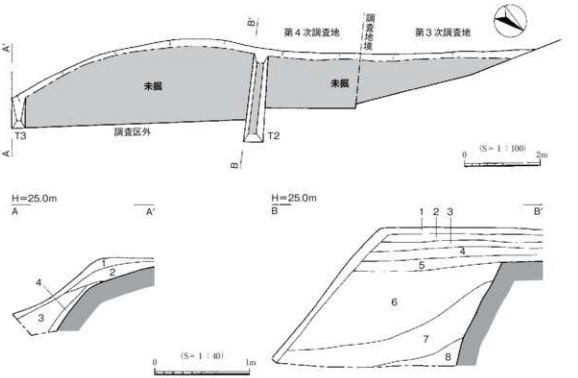
第８図　Ⅰ期　土塁１遺構図

土塁１（第８図）

土塁１は、北東−南西方向にのび、南西側は地山を削り出しているが、北東側は地山地形が北東へ傾斜しているため、整地がなされ、盛土をして土塁を構築している。南東側には腰郭11があり、南西側の地山部分ではその堀形を確認することができたが、北東側の整地部分では堀形が判然としなかったため、トレンチ（Ｔ４）を設定して堀形を確認した。一方、北西側は工事の関係で南西側を掘り下げて調査をすることができなかったが、北東側のトレンチ（Ｔ１）で土塁の基底部を確認した。規模は、検出した範囲で長さ4.5m、幅は検出面での上端で3.6〜4.95m、残存高0.35mを測る。

腰郭８（第９、10図）

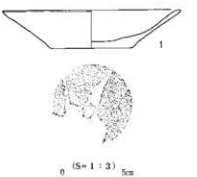
腰郭８は、北東側の斜面で検出した。腰郭９の北東側に位置し、北東側は住宅団地造成工事により削平されているが、規模は、検出した範囲で長さ9.1m、幅0.8〜2.2mを測る。深さについては、調査区の北東側の斜面には大量の廃土があり、遺構を掘削するのには廃土を除去しなければならなく、



第９図　腰郭８遺構図

調査期間の関係もあり、全体的に約20cm掘り下げたに留めたが、１区と２区との境界と２区の南東壁際の２ヶ所にトレンチ（T２、T３）を設定して調査を実施した。T２では検出面から1.1m掘下げたが、平坦面の検出までには至らなかった。なお、第３次調査のものと合わせると検出した範囲で長さ13.9mを測る。

本遺構からは備前焼と土師質土器が出土した。１は土師質土器の坏身で、口縁部は外傾して立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。



第10図　腰郭８出土遺物図

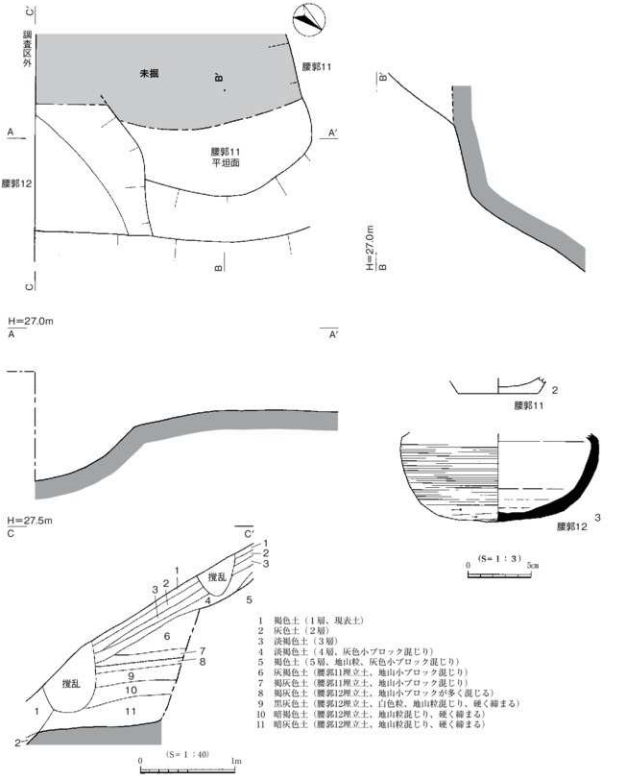
腰郭９（第７図）

腰郭９は、北東側の斜面で検出した。北西−南東方向にのび、北東側は腰郭８が掘り込まれており、規模は検出した範囲で長さ9.4m、幅1.8～3.0m、頂部平坦面との比高差4.5mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。平坦面では溝状遺構２条を検出した。溝２は幅0.5～0.8m、深さ10～25cmを測り、腰郭９の平坦面の壁際に位置することから、排水用の溝と考えられる。また、溝７は溝２に切られているが、幅0.3～0.4m、深さ10cmを測り、頂部平坦面の土塁１の北西側の基底部の延長上付近で折れ曲がって溝２に合流しており、土塁１との関連が示唆される。

本遺構からは、遺物は出土しなかった。

腰郭11（第11図）

腰郭11は、調査区の南東側の頂部平坦面から切岸にかけて検出した。遺構の掘削は行わず、平面的な検出に留めたが、北東側の切岸の下部で平坦面の一部を検出した。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。平坦面では遺構は検出されなかったが、規模は検出した範囲で長さ2.0m、幅0.8m、頂部平坦面との比高差は3mを測る。



第11図　腰郭11、12遺構図及び出土遺物図

本遺構からは、土師質土器が出土した。2は土師質土器の坏身あるいは皿の底部であるが、摩滅のため底部の切り離し方法は不明である。

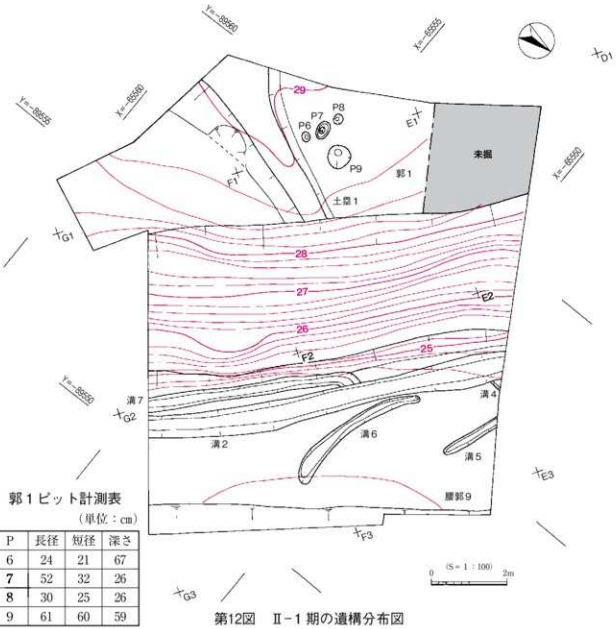
腰郭12（第11図）

腰郭12は、腰郭11の平坦面の南東側で検出した。南東側は調査区外にかかっているが、検出した範囲で長さ1.35m、幅1.25m、頂部平坦面との比高差は3.5mを測る。

本遺構からは、須恵器と備前焼が出土した。3は須恵器の平瓶で、外面は体部にはカキ目、底部には回転ヘラケズリが施されている。

2．Ⅱ－1期

Ⅱ－1期の遺構は、地山上面（第4遺構面）で検出した。頂部平坦面は、1区については工事の関係で未調査であるが、2区では、Ⅰ期の腰郭11を埋め立て、さらにⅠ期の土塁1の南東側と北西側を



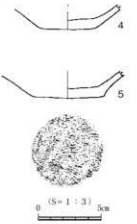
郭1ピット計測表

（単位：cm）

P	長径	短径	深さ
6	24	21	67
7	52	32	26
8	30	25	26
9	61	60	59

第12図　Ⅱ－1期の遺構分布図

削平して郭１の拡張を行っている。一方、北東側斜面の中腹では、腰郭８を埋め立てて、腰郭９を北東側に拡張している。



第13図　Ⅱ－１期
郭１出土遺物図

郭１（第12、13図）

郭１は、Ⅰ期の腰郭11を埋め立て、さらにⅠ期の土塁１の南東側と北西側を削平して拡張を行っている。規模は、１区については工事の関係で未調査であるが、検出した範囲で長さ9.8m、幅4.5mを測る。平坦面の標高は28.1～29.0mを測り、平坦面では土塁１基とピット４基を検出した。

本遺構からは、土師質土器が出土した。４、５は土師質土器の坏身の底部で、いずれも底部外面には回転糸切りが施されている。

土塁１（第14図）

当該期の土塁１は、郭１を拡張するためにⅠ期の土塁１の南東側と北西側を削平して規模を縮小している。規模は検出した範囲で長さ5.6m、基底部幅1.2～3.0m、高さ0.1～0.5mを測る。

腰郭９（第12、15図）

当該期の腰郭９は、Ⅰ期の腰郭８を埋め立てて、北東側に郭を拡張している。北東側は住宅団地造成工事により削平されているが、検出した範囲で長さ9.5m、幅2.8～4.4mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。平坦面では溝状遺構５条を検出した。溝４と溝５は、第３次調査では、溝２から北東及び東へのびており、溝２の排水用の溝である可能性がある。

本遺構からは、青磁、青花、備前焼、土師質土器、瓦質土器が出土した。６、７は青磁の碗で、６は上田分類Ｅ類、７は上田分類Ｄ類である。８は青花の鉢か。外面には二重圏線と唐草文が施文され、口縁部には円形浮文がある。９は備前焼の壺の肩部で、外面には波状文が巡っている。乗岡編年の中世５b期である。10～12は土師質土器である。10、11は皿で、11の内面にはタールが付着している。12は坏身の底部で、底部外面には回転糸切りが施されている。13は瓦質土器の角形の火舎の口縁部で、口縁部は逆Ｌ字状に折れ曲がり、口縁端部は水平な面をなしている。外面には剣花菱文のスタンプ文がある。

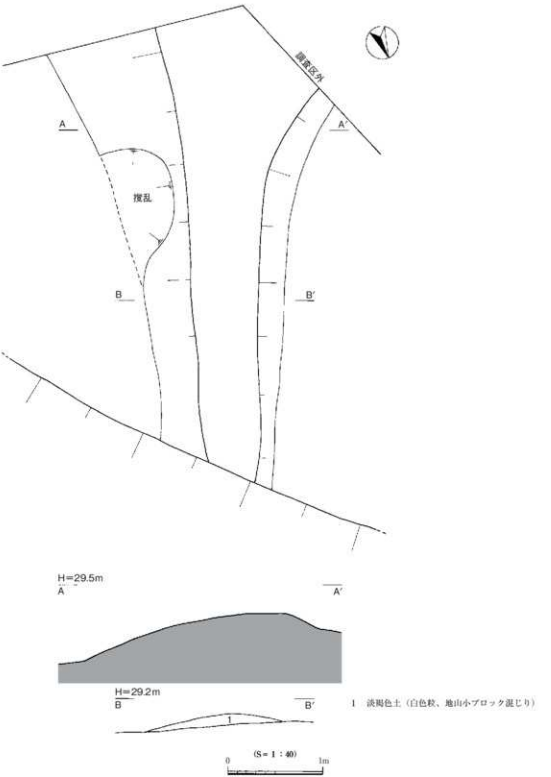
３．Ⅱ－２期

Ⅱ－２期の遺構は、５層上面（第３遺構面）で検出した。頂部平坦面には郭１があり、切岸の上部には段状遺構５がある。一方、北東側斜面では、腰郭９は整地が行われ、平坦面でピット４基が検出された。

郭１（第16、18図）

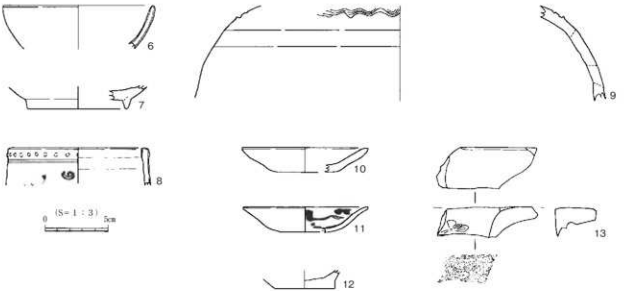
当該期の郭１の平坦面の標高は28.5～29.1mを測り、規模は、検出した範囲で長さ12.8m、幅1.0～4.4mを測る。平坦面では遺構は検出されなかった。

本遺構からは、青磁、白磁、青花、備前焼、土師質土器が出土した。14、15は青磁の碗である。14

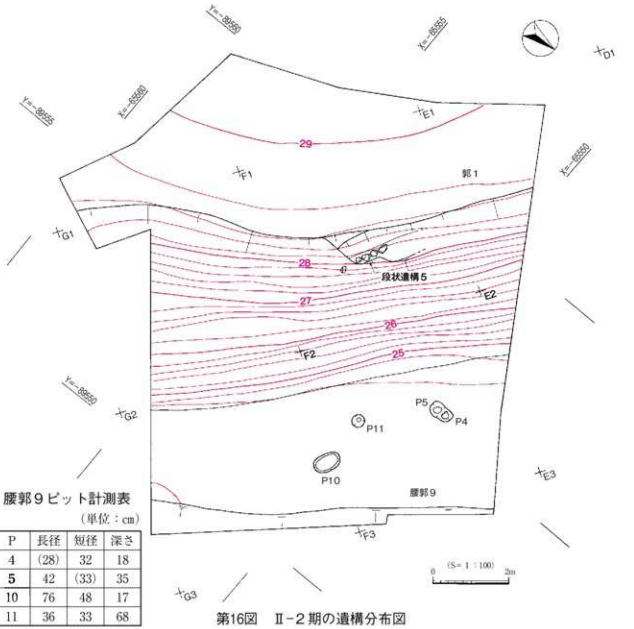


第14図　Ⅱ−1期　土塁1遺構図

は上田分類のB5類で、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。15は上田分類D類である。16は小野分類B群の青花皿で、外面には二重圏線と牡丹唐草文、内面には二重圏線が施文されている。17は中国産の黒釉陶器の底部で、底部外面の縁辺部には砂目がある。18は瓷器系陶器の壺で、口縁部が外傾し、口縁端部外面には強い回転ナデが施され、口縁端部は平坦気味となっている。19は備前焼の四耳壺の肩部で、粘土紐の耳を貼り付けている。乗岡編年の中世5b期である。20～28は土師



第15図　Ⅱ－１期　腰郭９出土遺物図

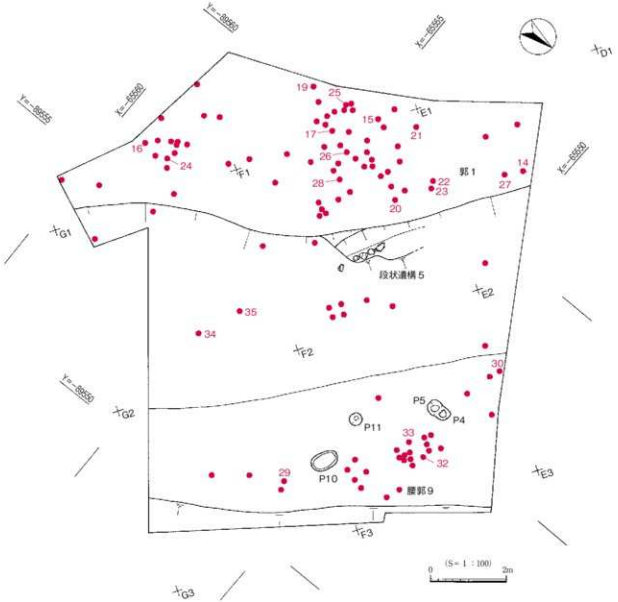


腰郭９ピット計測表

（単位：cm）

P	長径	短径	深さ
4	(28)	32	18
5	42	(33)	35
10	76	48	17
11	36	33	68

第16図　Ⅱ－２期の遺構分布図



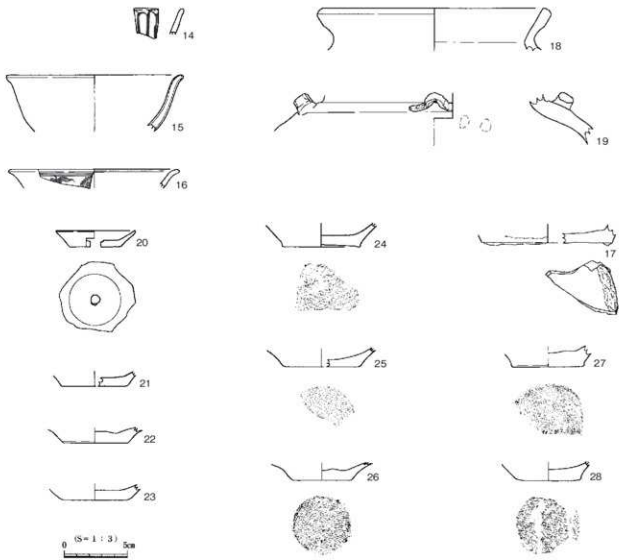
第17図　Ⅱ－２期出土遺物分布図

質土器である。20は皿で、底部には孔径7.5㎜の孔が穿たれている。21～28は坏身あるいは皿の底部で、21、22は摩滅のため底部の切り離し方法は不明であるが、23～28は底部外面に静止糸切りを施している。

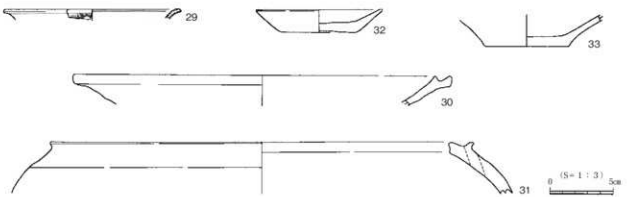
腰郭９（第16、19図）

当該期の腰郭９は地山の上に厚さ10cm前後の整地を行っている。平坦面では、遺構の検出が困難であったため、下層の地山上面で遺構を検出し、その埋土の状況から本遺構面から掘り込まれている遺構を判断した。平坦面では中央から北西側にかけてピット４基を検出した。各ピットの規模は、第16図のピット計測表を参照されたい。

本遺構からは、青磁、白磁、青花、備前焼、瀬戸・美濃焼、土師質土器が出土した。29は小野分類Ｂ群の青花皿で、外面には一重圏線と牡丹唐草文、内面には一重圏線が施文されている。30は瀬戸・美濃焼の皿で、受け部を有する。31は備前焼の水屋甕で、口縁部は内湾し、口縁端部外面には蓋受け



第18図　Ⅱ-2期　郭1出土遺物図

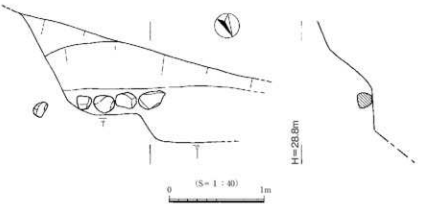


第19図　Ⅱ-2期　腰郭9出土遺物図

の突帯が巡る。乗岡編年の中世5b～6a期である。32、33は土師質土器である。32は皿で、口縁部は外傾し、底部外面には静止糸切りが施されている。33は坏身の底部で、摩滅のため底部の切り離し方法は不明である。

段状遺構５（第20図）

段状遺構５は、北東側斜面の標高28.0～28.6mで検出した。北西側は１区にかかるが、１区では検出することができなかった。南東側は削平され、北西側の１区では検出ができなかったため、現状では平面形態は不明であるが、切岸の上端に沿って南東–北西方向にのびる段状遺構と考えられる。平坦面の壁際には15～30cm大の礫が４石並び、南東側の遺構外にある礫は本遺構から転落したものと考えられる。規模は、検出した範囲で長さ2.3m、幅1.0m、深さ0.5mを測る。



第20図　段状遺構５遺構図

本遺構からは備前焼と土師質土器が出土したが、いずれも細片であるため、図示することができなかった。

切岸出土遺物（第21図）

当該期の切岸からは、青磁、備前焼、土師質土器が出土した。34は備前焼の擂鉢で、口縁部は直立し、口縁端部外角をつまみ出している。乗岡編年の中世５b期である。35は土師質土器の坏身あるいは皿の底部で、摩滅のため底部の切り離し方法は不明である。

第21図　Ⅱ–２期　切岸出土遺物図

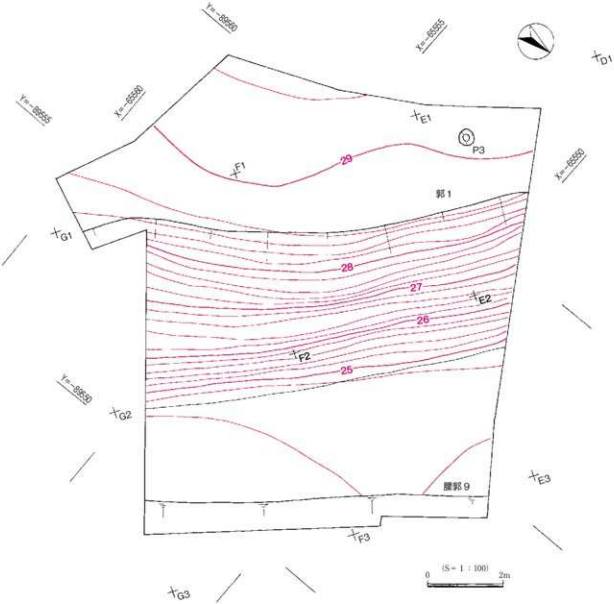
４．Ⅱ–３期

Ⅱ–３期の遺構は、４層上面（第２遺構面）で検出した。頂部平坦面には郭１があり、北東側斜面中腹には腰郭９があるが、腰郭９の平坦面では遺構は検出されなかった。

郭１（第22、24図）

当該期の郭１の平坦面の標高は28.6～29.3mを測り、平坦面の北西側でピット１基（P３）を検出した。P３の規模は、長径48cm、短径38cm、深さ25cmを測る。

本遺構からは、青磁、青花、備前焼、土師質土器が出土した。36は上田分類Ｄ類の青磁碗である。37、38は土師質土器の坏身あるいは皿の底部で、37は摩滅のため底部の切り離し方法は不明であるが、38は底部外面に静止糸切りを施している。



第22図　Ⅱ－3期の遺構分布図

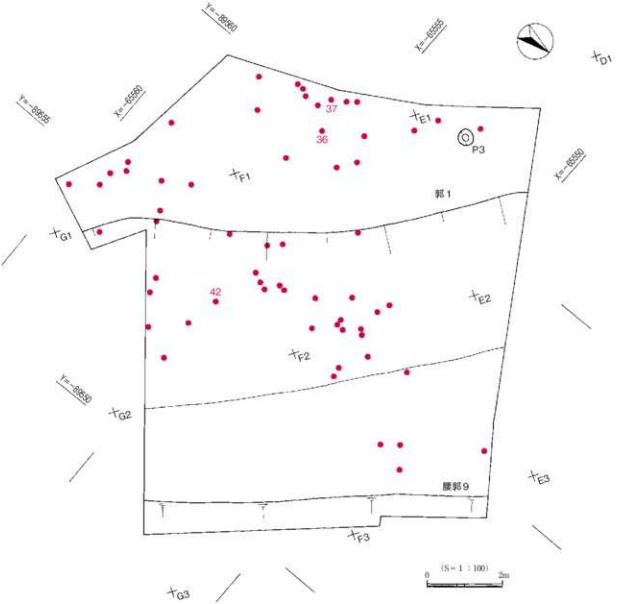
腰郭9（第22、25図）

当該期の腰郭9は、4層上面（第2遺構面）を平坦面とするが、平坦面では遺構は検出されなかった。

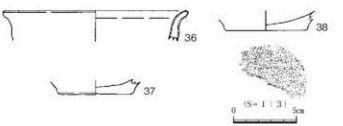
本遺構からは、青磁、白磁、備前焼、土師質土器が出土した。39は上田分類B5類の青磁碗で、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。40、41は土師質土器である。40は皿で、口縁部は外反し、底部外面には静止糸切りが施されている。41は坏身の底部で、底部外面には回転糸切りが施されている。

切岸出土遺物（第26図）

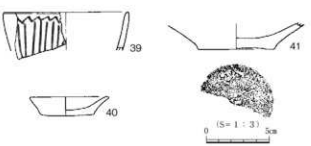
当該期の切岸からは、青磁、白磁、備前焼、土師質土器が出土した。42は青磁であるが、器種は不明である。口縁端部が大きく外方へ屈曲し、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。



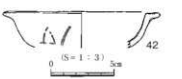
第23図　Ⅱ－３期出土遺物分布図



第24図　Ⅱ－３期　郭１出土遺物図



第25図　Ⅱ－３期　腰郭９出土遺物図



第26図　Ⅱ－３期　切岸出土遺物図

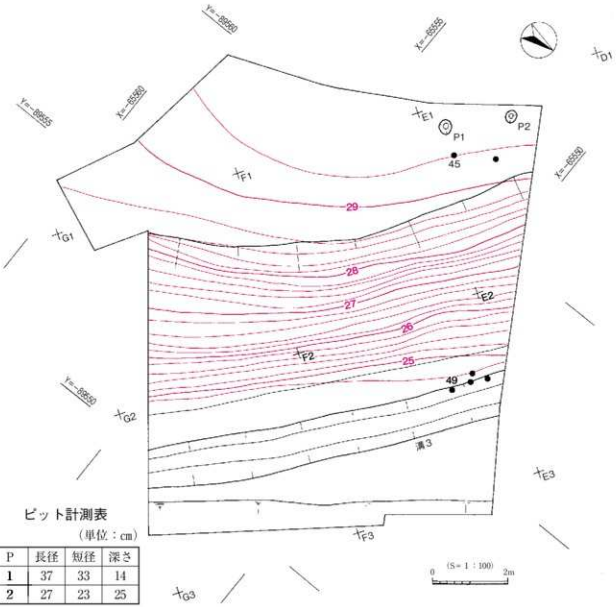
5．Ⅲ　期

Ⅲ期の遺構は、３層上面（第１遺構面）で検出した。北東側斜面中腹の平坦地で溝状遺構を１条検出した。

溝３（第27図）

溝３は、北東側斜面中腹の平坦地で検出した。南東−北西方向にのび、規模は検出した範囲で長さ9.6m、幅1.0～1.25m、深さ５～15cmを測る。埋土は、草根が多く入り込んだ暗褐色土の単層である。遺物は出土しなかったが、第３次調査の状況から、本遺構の帰属時期は、現代と考えられる。

この平坦地は『石井村田畑地続字限図・字要害』（明治２年）の中段の平坦地に該当すると考えられ、地目は畑地となっており、本遺構は、畑の排水用の溝と考えられる。



ピット計測表

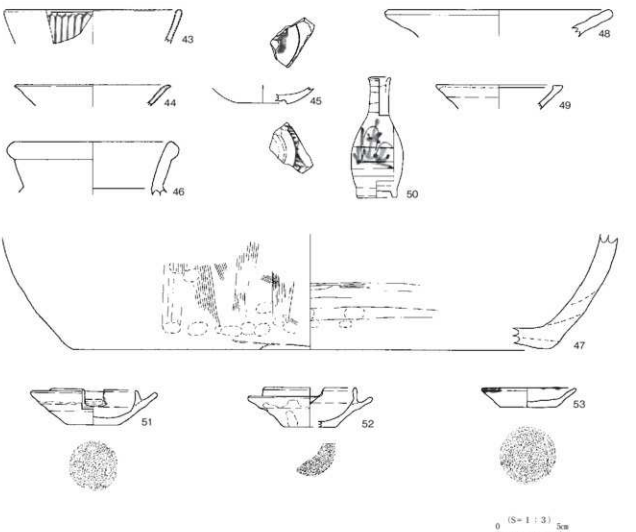
（単位：cm）

P	長径	短径	深さ
1	37	33	14
2	27	23	25

第27図　Ⅲ期の遺構分布図及び出土遺物分布図

遺構外出土遺物（第28図）

43は上田分類B5類の青磁碗で、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。44は森田E群の白磁皿である。45は小野分類C群の青花皿で、外面には芭蕉葉文、内面には一重圏線と捻花文が施文されている。46、47は備前焼である。46は壺で、口縁部は外傾し、口縁端部外面を肥厚させている。乗岡編年の中世5a～5b期である。47は甕の体部下部から底部にかけての部分である。48、49は古瀬戸である。48は甕の口縁部、49は皿の口縁部である。50は伊万里焼の御神酒徳利で、外面には草花文が施文されている。51、52は受け部を有する灯明皿で、いずれも内面から受け部外面にかけては施釉がなされているが、体部から底部にかけての外面は露胎となっている。また、底部外面には回転糸切りが施されている。53は土師質土器の皿で、口縁部は僅かに外反し、底部外面には回転糸切りが施されている。口縁部の内外面にはタールが付着していることから灯明皿として使用されたと考えられる。



第28図　Ⅲ期　遺構外出土遺物図

第4章　総　括

第1節　出丸の構造と機能

今回の調査は、出丸の頂部平坦面の東側とその北東側斜面を対象として実施した。本稿では、これまで実施した第1次～第4次調査で確認された遺構と遺物から出丸の構造や機能等について検討を行ってみたい。

第1次調査と第2次調査では、Ⅰ～Ⅲ期の3時期の遺構を確認しているが、第3次調査と第4次調査では、5面の遺構面を確認し、従来のⅡ期がⅡ-1期～Ⅱ-3期の3時期に細分され、全体的には5時期に時期区分されるものと考えられる。各時期の帰属時期は、Ⅰ期が15世紀後半、Ⅱ期が16世紀前半～中頃であるが、Ⅱ-1期～Ⅱ-3期は16世紀前半～中頃の範疇で、各々どれくらいの時期幅を有するのかは現時点では明らかにすることができなかった。Ⅲ期は現代までも含む近世以降である。

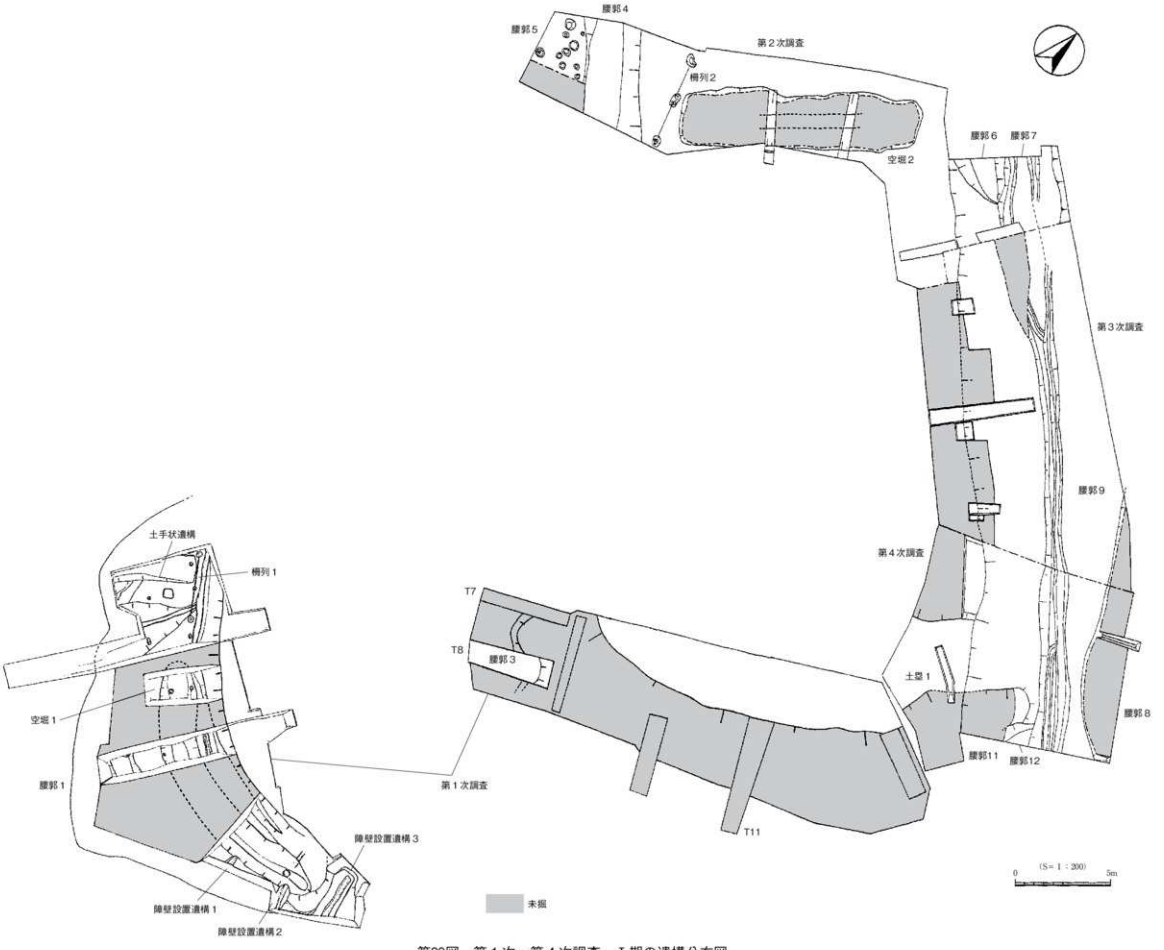
本稿では、この時期区分に準拠して、時期毎に出丸の構造について検討を行ってみたい。

1．Ⅰ　期

Ⅰ期には、頂部平坦面では、第2次調査地の南西側には腰郭4と腰郭5の2段の腰郭を構築し、その北東側には北東-南西方向にのびる長さ12.7m、上部幅2.5～3.2m、底面幅0.7m、深さ1.7mを測る空堀2を配している。空堀2の堀形は直線的ではなく、楕円状の掘り込みが連続する形態となっていることから、空堀2を掘削するにあたっては複数の作業者での掘削が窺える。また、空堀2の下層には地山に由来する層が北西から南東へ傾斜堆積していることから、空堀2の北西側に空堀2と平行する土塁の存在が想定される。空堀2の南西側には柵列2があり、北東側は切岸となっていることから、土塁は空堀2の北西側のみに存在したと想定される。土塁の北西側は、住宅団地の造成工事によって大きく削平されているため、その様相は窺い知れないが、明治2年（1869）作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』では、本丸と出丸との間が切通し状となっていることから堀切が存在した可能性がある。

頂部平坦面の東側（第4次調査地）の郭1の南東側の縁辺部には北東-南西方向にのびると考えられる土塁1があり、規模は検出した範囲で長さ4.5m、幅は検出面での上端で3.6～4.95m、残存高0.35mを測る。土塁1は南西側は地山を削り出しているが、北東側は地山地形が北東へ傾斜しているため、整地がなされ、盛土をして土塁を構築している。土塁1は第1次調査地の郭1の縁辺部にも巡っていたと考えられるが、上部が削平されていることと、北西側が調査区外にかかっていることから確認することができなかった。また、土塁1は腰郭11に沿うように北東-南西方向にのび、北東側は切岸の上端で完結していることから、郭1の北東側には土塁は存在しなかったと考えられる。第2次調査地の北西側には土塁の存在が想定されるが、第1次調査と第2次調査の南西側では土塁は検出されてはおらず、郭1の南東側と北西側のみに土塁が存在したと考えられる。

頂部平坦面の南東側（第1次調査地）では、トレンチ調査（T7・T8）で確認したのみであるが、南西側に頂部平坦面との比高差1.7～1.9mを測る腰郭3がある。T8の腰郭3の北東側では北東へ向かって傾斜する切岸の肩を検出したことから腰郭3の北東側にはさらに一段下がった腰郭の存在が窺



第29図　第１次～第４次調査　Ⅰ期の遺構分布図

える。調査区の中央やや北東寄りのトレンチ（T11）では地山を２m以上ほぼ垂直に掘り込んだ切岸を確認した。また、発掘調査後に行われた工事の法面では、南東側斜面の北東側で頂部との比高差約2.5mの腰郭の断面が観察された。さらに東側（第４次調査地）では腰郭11、12の２郭があり、腰郭11は掘削を行わなかったが、切岸の下部で平坦面の一部を確認しており、頂部平坦面との比高差は３mを測る。以上のことを勘案すると、腰郭３の北東側の出丸の南東側から東側にかけての斜面には頂部平坦面との比高差３mを測る腰郭11が巡ると推察される。

南西側斜面の中腹には腰郭３から９m下がった位置に腰郭１があり、腰郭１の中央やや北西寄りから東側にかけては空堀１が巡る。また、腰郭１の東側には障壁設置遺構が３カ所あり、北西側には土手状遺構があり、腰郭１の両側の防御を固めている。また、発掘調査後に行われた工事の法面では、腰郭３と腰郭１との間に腰郭の断面が観察され、南西側斜面の調査範囲内においては３段の腰郭が存在したと考えられる。さらに、明治２年（1869）作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』では、調査区外の南西側にもう一段の腰郭が認められ、その位置に腰郭の痕跡と考えられる段状の畑地が残存していることから、南西側の斜面には４段の腰郭が存在したと考えられる。

北東側斜面では、傾斜度60°の切岸があり、頂部平坦面から3.5～4.5m下がった位置に腰郭６、７、９の３基の腰郭を構築し、さらにその北東側にも腰郭８を構築している。腰郭８は、住宅団地造成工事により削平されているが、本来は北東側に広がり、さらに北西側にのびていたと考えられる。腰郭８の平坦面の高さについては、調査区の北東側に多量の廃土があるため完掘することができず、トレンチ調査でも検出面から1.1mの深さまで掘削したが、平坦面の検出には至らなかった。

調査区の北西側では、腰郭６、７、９の３基の腰郭が南西―北東方向に連続して構築されている。この部分は本丸と出丸とを隔てる堀切に隣接する部分で、『旧成実村史』によると、本丸の上段の南東側を「マス形」、中段の東側を「昇りの段」と呼んでいたようであり、本丸の南東側に本丸への登城路が存在したと推察される。また、想像の域は出ないが、出丸の北隅にも出丸への登城路の存在が想定され、おそらく、本丸と出丸において防御上、最も弱点である登城路の防御を強化するために、この位置に３基の腰郭を連続させて構築し、出丸の登城路を昇りきった頂部平坦面には空堀２と土塁を配したものと考えられる。

このようにみてみると、Ⅰ期にはかなりの防御機能を有していることから、軍事的性格が強いと考えられる。

２．Ⅱ－１期

Ⅱ－１期には、頂部平坦面の南東側（第１次調査地）では、Ⅰ期の腰郭を版築状に埋め立てて、南東側へ郭１の拡張を行っている。また、頂部平坦面の北西側（第２次調査地）では、Ⅰ期に存在したと想定される空堀２の北西側の土塁を削平して、空堀２を人為的に埋め立てて頂部平坦面の郭１を拡張するとともに南西側の腰郭４も腰郭５を埋め立てて拡張を行っている。さらに、頂部平坦面の東側（第４次調査地）でも腰郭11と腰郭12を版築状に埋め立てるとともに、Ⅰ期の土塁１の両側を削平し、郭１の拡張を行っている。

拡張された郭１では、南東側ではピット30基、土坑３基、集石遺構１基、北西側ではピット54基、腰郭１基、東側ではピット４基、土塁を検出した。このうちピットは建物跡や柵列として断定できるものはなかったが、これらのなかには、深く掘り込まれたものや柱の根固めに用いられたと考えられ

る礫や陶磁器が据え付けられているものがあることから建物跡の存在が推察され、貿易陶磁をはじめとする多量の遺物が出土していることから、日常的な居住が窺える。しかし、これらの遺構はⅡ期の範疇に納まるものであるが、各遺構がⅡ－１期～Ⅱ－３期のいずれの時期に帰属するのかは判断できなかった。なお、頂部平坦面の北東側（第３次調査地）は、工事法面保護の関係で未調査であるため、その様相は窺い知れない。

南西側斜面では、Ⅰ期の腰郭１を版築状に埋め立てて、新たに拡張した腰郭２を構築している。腰郭２の平坦面ではピット等の遺構は検出されず、建物等の施設は存在しなかったと考えられる。北東側斜面では、腰郭６と腰郭７はⅠ期から継続して存在し、腰郭９は、腰郭８を埋め立てて北東側に拡張している。腰郭９は、位置的に明治２年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』の中段の腰郭に該当すると考えられ、本来はさらに北東へ大きく広がっているが、住宅団地造成工事により大きく削平され、幅1.3～3.5mしか残存していない。

３．Ⅱ－２期

Ⅱ－２期には、頂部平坦面では、南東側（第１次調査地）と北西側（第２次調査地）にピットが集中し、北東側（第３次・第４次調査地）は調査区の制約もあろうがピットの存在は希薄である。この傾向は続くⅡ－３期にも認められる。また、Ⅰ期からⅡ－１期にかけて存在した土塁１は、郭１の造成によって土塁１の上面まで埋め立てられ、郭１を南北に隔てる防御あるいは区画施設としての役割は終焉を迎える。

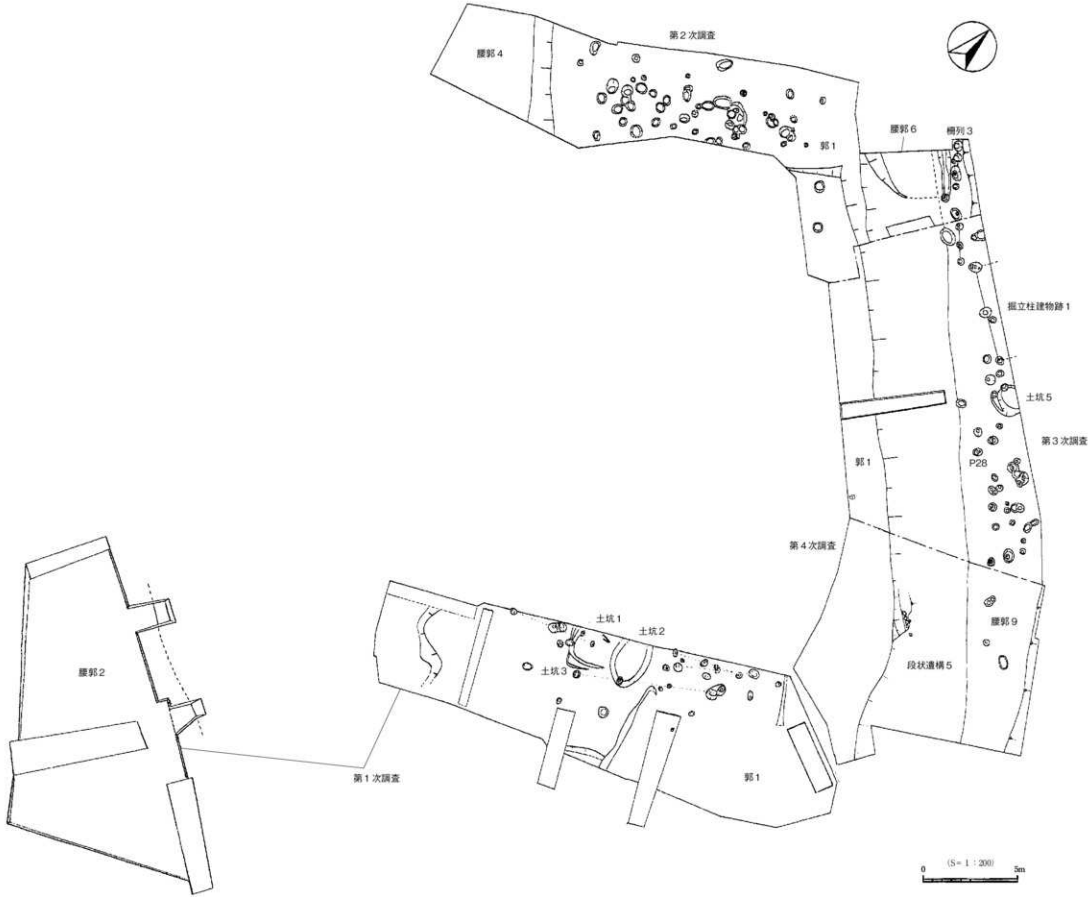
北東側斜面では、腰郭９はⅠ期～Ⅱ－１期には地山を削り出したままで、整地を行わずに平坦面を構築していたが、当該期には、地山の上に10cm前後の盛土をして、整地を行い、掘立柱建物跡１棟、柵列１条、土坑１基、ピット39基が検出された。掘立柱建物跡１は北東側が住宅団地造成工事によって削平されているが、桁行２間、梁行１間の建物と想定され、柱間距離が2.5mと広く、性格は不明であるが、大型の建物であったと考えられる。柵列３は、腰郭９と平行するように北西-南東方向にのびる。北西側は調査区外にのびる可能性があるが、検出した範囲では長さ6.5mを測る。柵列の中央には柱間距離が長い部分があり、この部分に出入口があったと推察される。Ⅰ期～Ⅱ－１期にかけて存在した腰郭７は、当該期になると、人為的に埋め立てられてしまうが、腰郭６は前代から継続して存在すると考えられる。また、柵列３の出入口部分が腰郭６の南東側の肩付近に位置することから、その関係性が示唆される。

腰郭９の平坦面で検出されたP28からは土師質土器の坏身と銭貨が26枚出土しており、地鎮的な性格が窺える。また、第４次調査では郭１から底部を穿孔した土師質土器の皿が出土しており、何らかの祭祀行為が窺える。

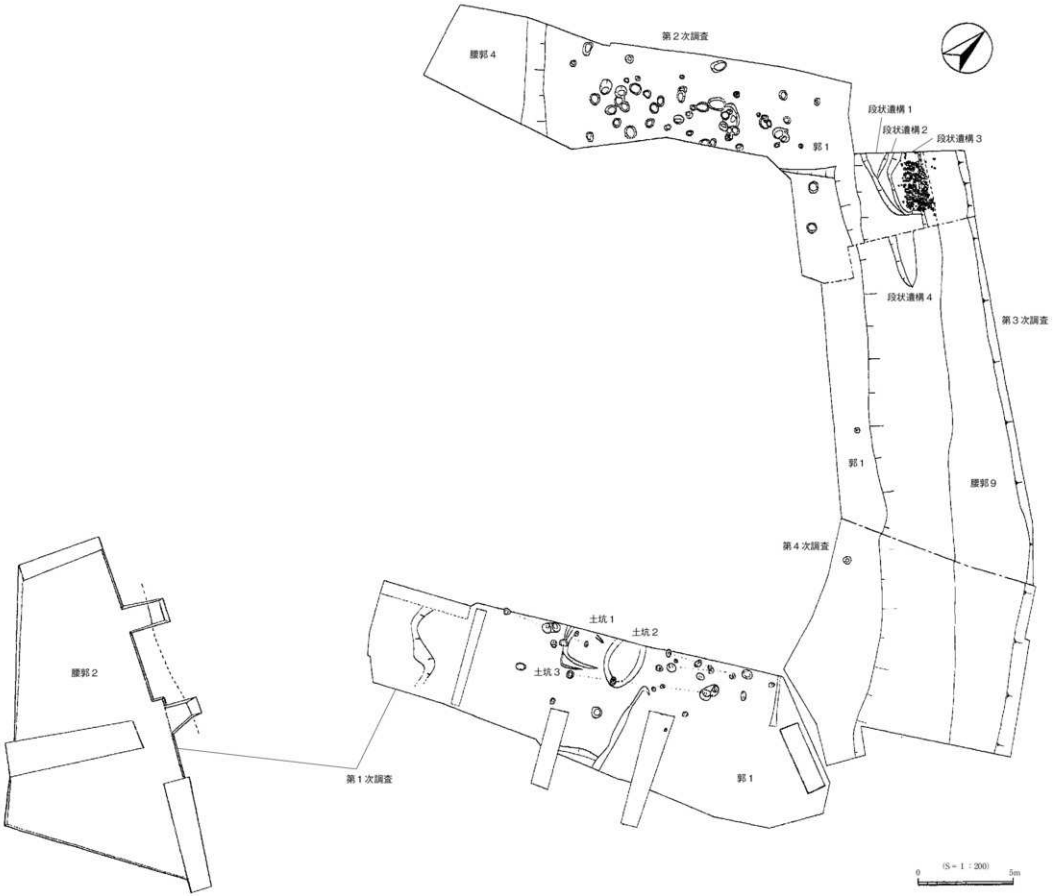
４．Ⅱ－３期

Ⅱ－３期には、頂部平坦面においては、前代と大きな変化はないが、北東側斜面では腰郭６を版築状に埋め立てる過程で、段状遺構を３基構築しており、最下段の段状遺構３には集石がみられる。腰郭９の平坦面では、ピット等の遺構は検出されず、当該期には前代のような施設は存在しないものと考えられる。続く16世紀後半に帰属する遺物が認められないことと、永禄10年（1567）以降、当要害の城主であったと考えられる片山平左衛門尉に関する史料が存在しないことから、この時期には城主

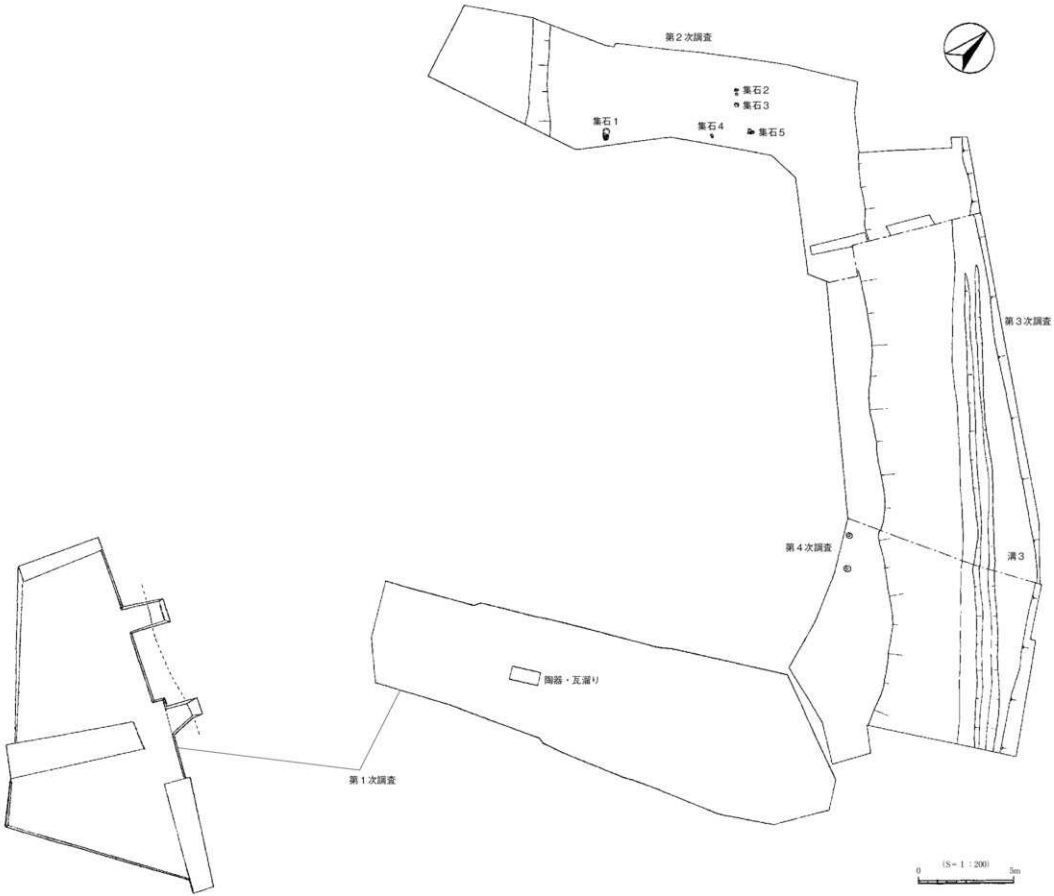
第30図　第１次～第４次調査　Ⅱ－１期の遺構分布図



第31図　第１次～第４次調査　Ⅱ－２期の遺構分布図



第32図　第１次～第４次調査　Ⅱ－３期の遺構分布図



第33図　第１次～第４次調査　Ⅲ期の遺構分布図

が不在、あるいは廃城となったと考えられる。

5．Ⅲ　期

Ⅲ期には、頂部平坦面の南東側（第１次調査地）と北西側（第２次調査地）で近世以降、北東側斜面中腹の平坦地（第３次・第４次調査地）で現代に帰属する遺構を検出した。第１次調査地では陶器・瓦溜りを検出した。遺構の堀形は認められなかったが、55cm×50cmの範囲に陶器と瓦が分布しており、被熱した礫や炭化物も認められる。第２次調査地では集石５基を検出した。これらは本来、ピット内に据え付けられていたものと考えられ、柱の根固めとして用いられたと考えられる。

一方、北東側斜面中腹の平坦地は明治２年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』では、地目が畑地となっており、近世以降に畑地化されたと考えられる。溝３は排水用に用いられた現代の溝と考えられる。

第２節　出土遺物について

１．第４次調査出土土器・陶磁器について

石井要害跡第４次調査から出土した土器と陶磁器について、中世に帰属する破片点数をすべてカウントし、グラフ化した。

既往の調査では、第１次調査と第２次調査では、土器と国産陶器の割合が逆転し、さらに、全体に占める土師質土器の坏・皿類の割合が大きく異なる。これに対して第３次調査では土器と国産陶器の割合がほぼ同じで、さらに、両器種とも第１次調査と第２次調査の中間的な割合を示す。第４次調査地は、第３次調査地の南東に隣接し、第３次調査地とともに第１次調査地と第２次調査地との間に位置する。そこで、調査地点による組成の違いを再検討するために、まずは第３次調査との比較を試みた。

第４次調査では、総出土点数393点のうち、土器が154点（39％）、瓦質土器が１点、国産陶器が165点（42％）、中国・朝鮮の陶磁器が73点（19％）であった。第３次調査では、土器が43％、国産陶器が41％、中国・朝鮮の陶磁器が15％とほぼ同じ割合である。

土器については、土師質土器の坏・皿類が144点と最も多く、土器の出土点数154点のうち94％を占める。京都系の皿は、可能性のあるものも含めて９点しかなく、土器のなかでも６％しか存在しない。これに対して、第３次調査では、土師質土器の坏・皿類が90％と割合がやや低くなっている。これは第３次調査では鍋・釜が３％、火鉢が１％を占めるのに対して、第４次調査では鍋・釜、火鉢が１点も出土していないことが反映されていると考えられる。

土師質土器の坏・皿類を土器と陶磁器全体の割合からみてみると、第４次調査では37％、第３次調査の39％とほぼ同じ割合を示している。

国産陶器は、総点数165点のうち備前焼が151点（92％）と最も多く、瓷器系陶器の壺・甕類は２点（１％）存在するのみである。第３次調査では備前焼が94％を占め、瓷器系陶器の壺・甕類は７点（３％）存在するのみであり、ほぼ同じ割合を示す。さらに備前焼のみを器種別でみると、壺・甕類が95％を占めており、第１次調査の97％、第２次調査の96％、第３次調査の94％と貯蔵具が大半を占めている。

貿易陶磁については、総点数73点のうち、青磁製品が43点（59％）を占め、第３次調査の51％よりもやや高い割合を示す。このうち、碗では線描きの蓮弁文碗が主体で、無文の碗が一定量存在する。

白磁はＥ群が主体で８点（11％）であり、第３次調査でもＥ群が主体で11％と同じ割合を示す。

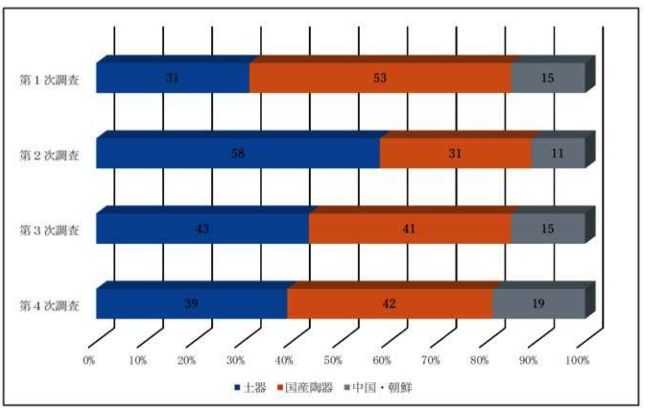
青花は碗・皿類を合わせて12点（16％）で、Ｂ群の皿が主体とみられる。第３次調査もＢ群の皿が主体であるが、22％とやや高い割合を示す。

朝鮮陶磁器は５点（７％）で、第３次調査の８％とほぼ同じ割合を示している。

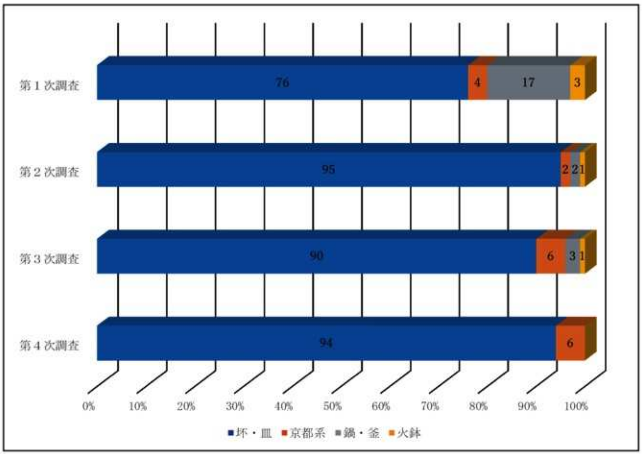
第３次調査と第４次調査の土器、陶磁器の組成は、貿易陶磁については青磁と青花に多少の差異が認められるが、土器、国産陶器、中国・朝鮮の陶磁器はほぼ同じ組成を呈している。このことから、出土遺物の組成を見る限りでは、第３次調査地と第４次調査地は同様な空間的機能が窺える。

第２表　石井要害跡　第４次調査出土土器・陶磁器集計表

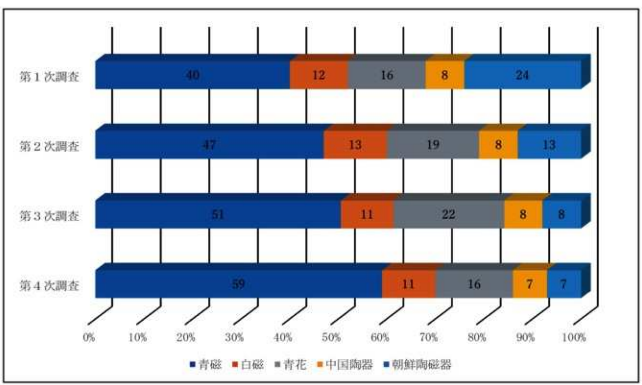
	土師器			瓦質土器	瀬戸・美濃			備前				染部系	青磁碗						青磁その他			白磁碗・皿		青花碗	青花皿・小杯			中国陶器		朝鮮		唐津			備考
	杯・皿	火鉢	その他・足部	火鉢	皿	天目	その他	擂鉢	壺口縁	壺・甕体部	建水	水屋甕	壺・甕体部	B5	C2	D	E	不明	龍泉窯系	香炉	不明	E	不明	不明	B	C	不明	掲鉢	その他	碗	壺	胎土目	碗	小計	
合計	144	1	9	1	4	1	4	1	3	144	1	2	2	14	1	5	1	19	1	1	1	3	5	2	3	1	6	4	1	1	4	1	2	393	
類別合計	154			1	9			151				2	40						3			8		2	10			5		5		3		393	



第34図　器種・産地別組成図



第35図　土器の器種別組成図



第36図　貿易陶磁の組成図

2．出土遺物から見た空間的機能

出丸の丘陵の南東側（第１次調査地）と北西側（第２次調査地）とは、土器と国産陶器の割合が逆転し、さらに、全体に占める土師質土器の坏・皿類の割合が大きく異なることから、明らかに空間上の機能差を示していると考えられる。第１次調査では、風炉、茶臼、建水、茶壷、天目茶碗などの茶道具が揃って出土していることから、茶の湯を行う会所的な施設が存在したと考えられる。これに対して、第２次調査では、碁石が出土し、土師質土器の坏・皿類の割合が高いことから遊宴的な施設の存在が窺える。第３次調査と第４次調査は、土器と国産陶器の割合がほぼ同じで、さらに、両器種とも第１次調査と第２次調査の中間的な割合を示している。このことから、第３次・第４次調査地は、第１次調査地と第２次調査地とは空間上の機能差を示していると考えられる。現在、頂部平坦面の中央には八幡神社が鎮座している。神社の祭神は応神天皇で、武神、弓矢八幡として武門繁栄を願う武士の崇敬を集めた。神社の創建年代は、現存する最古の棟札は貞享３年（1686）であり、どこまで遡るかは明らかではないが、築城当初から祈願所として創建されていたという見解もある。第３次・第４次調査地は、現在の社殿の背後に位置し、Ⅱ−２期には、第４次調査の郭１から底部を穿孔した土師質土器の皿が出土し、第３次調査の腰郭９の平坦面で検出したＰ28には土師質土器の坏身と銭貨26枚が埋納されており、地鎮的な性格が窺え、丘陵の北東側は祭祀を執り行う空間である可能性も考えられる。

なお、第１次調査と第２次調査では、土器と国産陶器の割合が逆転しているが、第３次調査と第４次調査の土器と国産陶器の割合はほぼ同じで、さらに、両器種とも第１次調査と第２次調査の中間的な割合を示しているのは、単なる偶然であるのか、あるいは第１次調査地と第２次調査地との間に位置するという調査地点による土器と国産陶器の組成の漸移的な推移を示しているのかは現時点では明らかにすることはできなかった。

参考文献

内藤　亮　1964「成実村の歴史をたずねて（四）石井要害跡」『旧成実村史』成実公民館

内藤　亮ほか　1971「幻影石井城」『米子市石井要害土地区画整理事業記念誌』米子市石井要害土地区画整理組合

亀尾八州雄　2002『ふるさと歴史散歩２　石井要害』

米子市編　2003『新修米子市史』第一巻　米子市

米子市編　1997『新修米子市史』第十二巻　米子市

高橋浩樹　2019『石井要害跡Ⅰ』一般財団法人　米子市文化財団

高橋浩樹　2019『石井要害跡Ⅱ』一般財団法人　米子市文化財団

第３表　腰郭８出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
1	10	土師質土器 坏身	※13.8	※ 6.4	3.0	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ	密	良	橙色	

第４表　腰郭11出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
2	11	土師質土器 坏身or皿	—	※ 6.4	△ 1.2	外面：体部ナデ、底部摩滅のため調整不明 内面：ナデ	密	やや良	黒褐色	

第５表　腰郭12出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
3	11	須恵器 平瓶	※48.0	—	△ 7.0	外面：体部カキ目、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	

第６表　Ⅱ－１期　郭１出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
4	13	土師質土器 坏身	—	※ 4.4	△ 1.9	外面：体部摩滅のため調整不明、底部回転糸切り 内面：摩滅のため調整不明	密	良好	褐色	
5	13	土師質土器 坏身	—	※5.5	△ 2.1	外面：体部摩滅のため調整不明、底部回転糸切り 内面：摩滅のため調整不明	密	良好	橙褐色	

第７表　Ⅱ－１期　腰郭９出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
6	15	青磁 碗	※11.8	—	△ 3.4		密	良	深緑色	上田Ｅ類 溝２出土
7	15	青磁 碗	—	※ 7.8	△ 1.8		密	良	オリーブ灰色	上田Ｄ類 溝２出土
8	15	青花 鉢か	※10.5	—	△ 3.0	外面：二重圏線、唐草文、円形浮文 内面：露胎	密	良好	明青灰色	溝５出土
9	15	陶器 壺	—	—	△ 7.5	外面：回転ナデ、波状文 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼 中世5b期 溝２出土
10	15	土師質土器 皿	※ 9.8	※ 4.4	1.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	浅黄橙色	溝２出土
11	15	土師質土器 皿	※10.0	※ 4.0	2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	黒褐色	内面タール付着 溝２出土
12	15	土師質土器 坏身	—	4.7	△ 1.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：摩滅のため調整不明	密	良好	淡褐色	溝２出土
13	15	瓦質土器 火舎	残存長 7.9	幅 3.2	残存高 2.4	外面：朝花菱文のスタンプ文	密	良	灰色	溝２出土

第８表　Ⅱ−２期　郭１出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	器高					
14	18	青磁碗	—	—	△ 2.0	外面：線描きによる蓮弁文	密	良	淡緑色	上田Ｂ5類
15	18	青磁碗	※13.8	—	△ 4.5		密	良	深緑色	上田Ｄ類
16	18	青花皿	※13.1	—	△ 1.5	外面：二重圏線、牡丹唐草文 内面：二重圏線	密	良好	青灰色	小野Ｂ群
17	18	陶器底部	—	※10.2	△ 1.4	外面：ナデ、底部砂目 内面：ナデ	密	良好	黒褐色	中国産
18	18	陶器壺	※17.6	—	△ 3.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	暗赤灰色	
19	18	陶器四耳壺	—	—	△ 4.1	外面：回転ナデ、粘土紐の耳あり 内面：回転ナデ	密	良好	灰褐色	備前焼 中世5b期
20	18	土師質土器皿	※ 6.3	4.0	1.3	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	浅黄橙色	底部穿孔 （孔径7.5mm）
21	18	土師質土器坏身or皿	—	※ 5.2	△ 1.7	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	浅黄橙色	
22	18	土師質土器坏身or皿	—	※ 5.0	△ 1.2	外面：体部ナデ、底部摩滅のため調整不明 内面：ナデ	密	良	灰白色	
23	18	土師質土器坏身or皿	—	※ 5.0	△ 1.3	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良	浅黄橙色	
24	18	土師質土器坏身or皿	—	※ 6.2	△ 1.9	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	黄橙色	
25	18	土師質土器坏身or皿	—	※ 6.0	△ 1.5	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	橙色	
26	18	土師質土器坏身or皿	—	4.6	△ 1.4	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	浅黄橙色	
27	18	土師質土器坏身or皿	—	※ 5.6	△ 1.6	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	浅黄橙色	
28	18	土師質土器坏身or皿	—	5.1	△ 1.5	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	黄橙色	

第９表　Ⅱ−２期　腰郭９出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	器高					
29	19	青花皿	※13.8	—	△ 0.8	外面：一重圏線、牡丹唐草文 内面：一重圏線	密	良好	灰白色	小野Ｂ群
30	19	陶器皿	※30.0	—	△ 2.4		密	良	灰黄褐色	瀬戸・美濃焼
31	19	陶器水屋甕	※29.8	—	△ 4.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼 中世5b～6a期
32	19	土師質土器皿	※10.0	※ 6.0	1.8	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	黄橙色	
33	19	土師質土器坏身	—	6.6	△ 2.5	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	橙色	

第10表　Ⅱ－2期　切岸出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
34	21	陶器 擂鉢	※26.7	—	△ 3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	赤茶色	備前焼 中世5b期
35	21	土師質土器 坏身or皿	—	6.2	△ 1.5	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	浅黄橙色	

第11表　Ⅱ－3期　郭1出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
36	24	青磁 碗	※14.3	—	△ 2.4		密	良好	緑灰色	上田D類
37	24	土師質土器 坏身or皿	—	※ 5.6	△ 1.2	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	黄橙色	
38	24	土師質土器 坏身or皿	—	※ 6.4	△ 1.5	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	橙色	

第12表　Ⅱ－3期　腰郭9出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
39	25	青磁 碗	※ 9.8	—	△ 3.0	外面：線描きによる蓮弁文	密	良	深緑色	上田B5類
40	25	土師質土器 皿	※ 6.2	4.2	1.5	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	黄橙色	
41	25	土師質土器 坏身	—	※ 6.0	△ 2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	良	浅黄橙色	

第13表　Ⅱ－3期　切岸出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
42	26	青磁 不明	※12.4	—	△ 2.8	外面：線描きによる蓮弁文	密	良好	オリーブ灰色	

第14表　Ⅲ期　遺構外出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層位	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
43	28	F1 表土	青磁 碗	※13.5	—	△ 2.7	外面：線描きによる蓮弁文	密	良好	明オリーブ色	上田B5類
44	28	E2 表土	白磁 皿	※11.8	—	△ 1.6		密	良好	白色	森田E群
45	28	D1 2層	青花 皿	—	—	△ 1.3	外面：芭蕉葉文 内面：一重圏線、捻花文	密	良	白灰色	小野C群
46	28	E2 表土	陶器 壺	※12.8	—	△ 4.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼 中世5a～5b期
47	28	E2 表土	陶器 甕	—	※37.4	△ 9.1	外面：ハケ、指押さえ 内面：板状工具によるナデ、 指押さえ、ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼
48	28	E2 2層	陶器 甕	※17.2	—	△ 2.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	暗オリーブ色	古瀬戸

49	28	F0 表土	陶器 皿	※ 9.8	—	△ 1.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰白色	古瀬戸
50	28	E2 表土	磁器 御神酒徳利	1.6	3.0	9.5	外面：草花文	密	良好	灰白色	伊万里焼
51	28	E2 表土	陶器 灯明皿	6.6	4.2	2.8	外面：口縁部～受け部施釉、 体部～底部露胎、 底部回転糸切り 内面：施釉	密	良好	褐色	外面煤付着
52	28	F2 表土	陶器 灯明皿	※ 7.2	※ 4.0	3.1	外面：口縁部～受け部施釉、 体部～底部露胎、 底部回転糸切り 内面：施釉	密	良好	暗褐色	
53	28	E1 表土	土師質土器 灯明皿	7.2	4.5	1.6	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	黄橙色	口縁部内外面タール付着

写真図版

２区　北東側斜面　調査前状況（北東から）

２区　調査地全体　調査前状況（北西から）

図版2

2区　頂部平坦面　調査前状況（北西から）

2区　斜面中腹平坦地　調査前状況（北西から）

調査位置全景（上が北西）

調査地全景（上が南西）

図版４

調査地全景（北西から）

調査地全景（北東から）

調査地全景（南東から）

頂部平坦面土層

図版6

斜面部土層

斜面中腹平坦地土層

１区　Ⅰ期の遺構全景（北西から）　※Ⅱ-１期・Ⅱ-２期の遺構も含む

２区　Ⅰ期の遺構全景（北西から）　※Ⅱ-１期・Ⅱ-２期の遺構も含む

図版８

１区　Ⅰ期　頂部平坦面（北西から）

２区　Ⅰ期　頂部平坦面（北西から）　※Ⅱ−１期の遺構も含む

１区　Ⅰ期　腰郭８（北西から）

２区　Ⅰ期　腰郭８（北西から）

図版10

Ⅰ期　腰郭11平坦面（北東から）

Ⅰ期　腰郭12（北東から）

Ⅰ期　腰郭12（北東から）

Ⅰ期　腰郭11、12土層

図版12

２区　Ⅱ−１期の遺構全景（北西から）　※Ⅱ−２期の遺構も含む

２区　Ⅱ−１期　頂部平坦面（北西から）　※Ⅱ−２期の遺構も含む

2区　Ⅱ−1期　腰郭9（北西から）　※Ⅱ−2期の遺構も含む

2区　Ⅱ−1期　腰郭9（南東から）　※Ⅱ−2期の遺構も含む

図版14

Ⅱ−１期　土壙１（北東から）

Ⅱ−１期　土壙１（南西から）

1区　Ⅱ−2期の遺構面検出状況（北西から）　※遺構検出前

2区　Ⅱ−2期の遺構面検出状況（北西から）　※遺構検出前

図版16

1区　Ⅱ-2期　郭1（北西から）

2区　Ⅱ-2期　郭1（北西から）

1区　Ⅱ−2期　腰郭9平坦面検出状況（北西から）　※遺構検出前

2区　Ⅱ−2期　腰郭9平坦面検出状況（北西から）　※遺構検出前

図版18

Ⅱ−２期　段状遺構５（北東から）

Ⅱ−２期　段状遺構５（南東から）

1区　Ⅱ−3期の遺構全景（北西から）

2区　Ⅱ−3期の遺構全景（北西から）

図版20

1区　Ⅱ-3期　郭1（北西から）

2区　Ⅱ-3期　郭1（北西から）

1区　Ⅱ-3期　腰郭9（北西から）

2区　Ⅱ-3期　腰郭9（北西から）

図版22

1区　Ⅲ期の遺構全景（北西から）

2区　Ⅲ期の遺構全景（北西から）

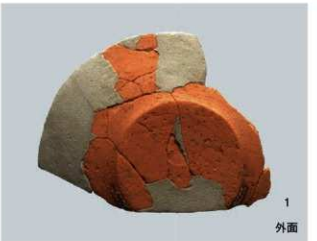
1区　Ⅲ期　頂部平坦面（北西から）

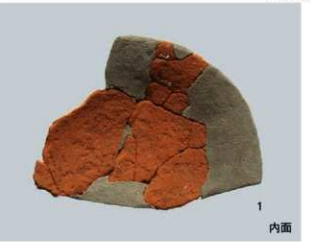
2区　Ⅲ期　頂部平坦面（北西から）

図版24

1区　Ⅲ期　溝3（北西から）

2区　Ⅲ期　溝3（北西から）





腰郭８出土遺物　（S＝１：２）

腰郭11出土遺物　（S＝１：２）

腰郭12出土遺物　（S＝１：２）

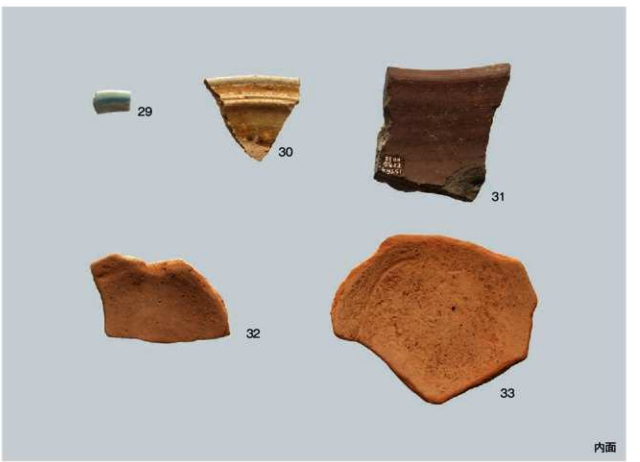
Ⅱ−１期　郭１出土遺物　（S＝１：２）　Ⅲ期　遺構外出土遺物（１）（S＝１：２）

図版26

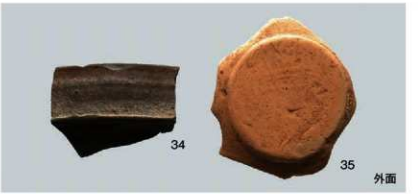
Ⅱ−1期　腰郭9出土遺物　　（S＝1：2）

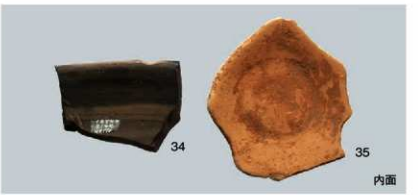
Ⅱ－2期　郭1出土遺物　（S＝1：2）

図版28

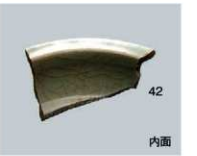


Ⅱ－2期　腰郭9出土遺物　　（S＝1：2）

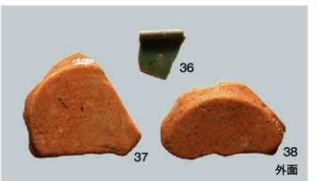




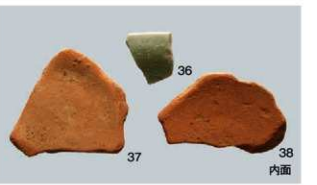
Ⅱ-2期　切岸出土遺物　（S＝1：2）



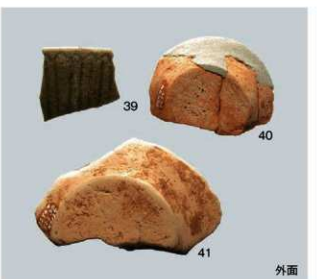
Ⅱ-3期　切岸出土遺物
（S＝1：2）



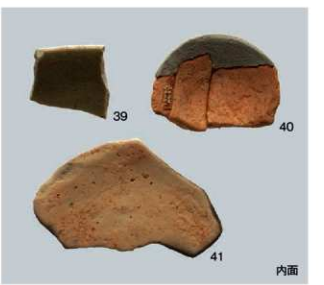
Ⅱ-3期　郭1出土遺物



（S＝1：2）



Ⅱ-3期　腰郭9出土遺物



（S＝1：2）

図版30

Ⅲ期　遺構外出土遺物（2）　（S＝1：2）

報告書抄録

ふりがな	いしいようがいあとよん
書名	石井要害跡Ⅳ
副書名	
巻次	
シリーズ名	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	19
編著者名	高橋浩樹
編集機関	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室
所在地	〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地　TEL・FAX　0859-26-0455 eメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発行年月日	西暦2020年３月26日　令和２年３月26日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石井要害跡	鳥取県 米子市 石井	31202	米子市 156	35度 24分 18秒	133度 20分 51秒	2019年 ８月19日 ～ 2019年 10月16日	500㎡	急傾斜地 対策工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石井要害跡	城館	中世	郭、腰郭、土塁、段状遺構	須恵器、青磁、白磁、青花、中国産陶器、朝鮮産陶磁器、国産陶磁器（備前、瀬戸・美濃、唐津、伊万里）、土師質土器、瓦質土器	

要約

石井要害跡は、米子市西部に位置し、加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地する。

今回の調査は、出丸と称される丘陵の頂部平坦面の東側とその北東側斜面の調査を実施した。

第１次、第２次調査では、Ⅰ期～Ⅲ期の３時期に時期区分されていたが、今回の調査では、第３次調査と同様に５面の遺構面を確認しており、従来のⅡ期がⅡ－１期～Ⅱ－３期に細分され、全体として５時期に時期区分されると考えられる。

調査の結果、Ⅰ期（15世紀後半）には、頂部平坦面で北東―南西方向にのびると考えられる土塁１を検出し、規模は検出した範囲で長さ4.5m、幅は検出面での上端で3.6～5.0m、残存高0.35mを測る。土塁１は第１次調査地の郭１の縁辺部にも巡っていたと考えられる。また、腰郭11、腰郭12の２郭が構築されており、腰郭11は掘削を行わなかったが、切岸の下部で平坦面の一部を確認しており、頂部平坦面との比高差は３mを測る。

Ⅱ期（16世紀前半～中頃）には、Ⅱ－１期～Ⅱ－３期に細分されるが、各時期がどれくらいの時期幅を有するかは不明である。Ⅱ－１期にはⅠ期の腰郭11と腰郭12を版築状に埋め立てるとともに、同じくⅠ期の土塁１の両側を削平して頂部平坦面の郭１の拡張を行っている。Ⅱ－２期にはⅠ期からⅡ－１期にかけて存在した土塁１は郭１の造成によって土塁１の上面まで埋め立てられ、郭１を南北に隔てる防御あるいは区画施設としての役割は終焉を迎える。一方、北東側斜面の腰郭９の平坦面では４基のピットを検出したが、掘立柱建物跡や柵列として断定できるものではなかった。Ⅱ－３期には北東側斜面の腰郭９の平坦面ではピットは検出されず、建物等の施設は存在しなかったものと考えられる。

Ⅲ期には、北東側斜面の平坦地は畑地化されたと考えられ、その排水用と考えられる現代の溝状遺構を検出した。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書19

鳥取県米子市

石井要害跡Ⅳ

２０２０年３月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団

〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地

ＴＥＬ　０８５９―２６―０４５５

印　　刷　勝美印刷株式会社